忽那諸島の蜜柑史――中島ミカンの近現代史――

森　武麿
MORI Takemaro

The Modern History of Ehime Nakajima Orange

【要旨】

忽那諸島調査から、瀬戸内海の離島、とくに中島を対象として、愛媛中島ミカン史を述べる。明治維新以降、瀬戸内海の島々に広がったミカン作の盛衰を通して、島の人びとの暮らしの変貌を明らかにすることである。そのためには①中島ミカンの導入はどのようにしてなされたのか、②忽那諸島の中島ミカン発展と瀬戸内海を通して市場との関係はどのようなものであったのか、③ミカンは忽那諸島の島々、中島町の経済構造をどのように変えたのか、の三つの課題を設定する。

第一の中島ミカン導入は和歌山有田の温州ミカンの伝来、広島からの伝来、そして中島在来の温州ミカンを基礎として他など、多様なルートが考えられるが、いろいろな説がある。現在の中島温州ミカンの導入の通説は、大浦の森田六太郎によるもので一八七二年（明治五年）、一八八七年（明治二十年）と移植年に違いがあるが、和歌山県有田からの苗木の導入である。

第二の忽那諸島とミカンと瀬戸内海の関係は、中世、近世以来の水軍と水運を前提に発展してきたことが明らかになる、とりわけ大正後期から昭和初頭、すなわち一九二〇年代から一九三〇年代のミカンの飛躍的発展の時期に、忽那諸島からミカン船で阪神市場にミカンが売られていったこと、さらには朝鮮、満洲市場へと海を通して広がっていったことが分かる。瀬戸内海の水運を考えなければ中島ミカン、島ミカンの今日の隆盛は理解できない。

第三のミカンと忽那諸島の経済構造の変化であるが、戦後高度成長による阪神、京浜市場向けの大衆消費は中島ミカンの爆発的発展をもたらした。この結果島の経済構造は完全にミカン専業化、ミカン栽培に一元化した。これをミカンモノカルチャーと表現したが中島町の経済構造の変化は愛媛県でもっとも典型的に展開したものである。

〔キーワード〕　中島ミカン、ミカン船、温州ミカン、中島青果組合連合会、忽那諸島

はじめに

本論は神奈川大学日本常民文化研究所の共同調査の一員として参加し、二〇〇九年から二〇一一年にかけて中島ミカンの個人調査を行い、纏めたものであり文責は筆者にある。

調査対象地は愛媛県の忽那諸島である。調査の前に、網野善彦『古文書返却の旅』（中公新書、一九九九年）を読んでみた。「海の領主―二神家と二神島」が今回の調査地を論じている。忽那諸島の二神島は、中世の「海の領主」として、河野水軍、村上水軍が暴れ回り、忽那氏が支配する拠点であり、近世まで九州と近畿を結ぶ瀬戸内海における海上交易の要衝であった。網野が二神家の古文書を借りたのが、一九五四年であり、高度成長が始まる時であった。その十年後の一九六五年にも二神島を訪ねているので、一九九五年の古文書返却は三十年ぶりの二神島の旅であった。

「島の状況は三十年前とは大きく変わっていた」「二神家の前の白砂青松の浜辺はまったく姿を消し」とある。たしかに、高度成長からバブル崩壊に至る四十年の変化は著しいものであったろう。そこで、私はこの共同調査で、愛媛県忽那諸島のミカンを調べてみようと思い立った。

愛媛県がミカンの主産地であることは誰でも知っている。「愛は静かに」という言葉がある。「愛」は愛媛県、「は」は和歌山県、「静かに」は静岡県であり、ミカンの三大産地である。対象とする愛媛県は、一九六五年に静岡県を抜いて全国一の柑橘生産県となる。ミカンの県外出荷では一九七〇年から三十四年間全国一を誇っていた。

ミカンの産地は、江戸時代からミカン特産地として有名な和歌山県有田の沿岸、近代になって成長した静岡から伊豆半島沿岸、愛媛県の瀬戸内海に面した沿岸と島嶼部、そして戦後に急成長する長崎、佐賀、熊本、大分、鹿児島の九州沿岸まで、太平洋から瀬戸内海沿岸を経て九州沿岸に至る、日当たり良い海辺の傾斜地に広がっていったのである。これを日本ミカンラインと呼ぶ。まさにミカンと海は切ってもきれない関係にある。

二〇〇九年九月と二〇一〇年三月の二回、二神島を常民研究所の共同調査で訪ねた。そして二〇一〇年九月の第三回調査で、二神島の隣、中島を訪ねた。中島は忽那諸島の中心に位置する島で、諸島のなかの最大の島、まさに真ん中の島ということである。この島が忽那諸島のミカンの発祥の地であり、中心地であった。中島ミカン発祥の地というのは、現在のＪＡえひめ中央農協中島支所の前にある島田茂一郎の碑に記録されている。日露戦後から中島から温州ミカンが忽那諸島に広がり、「島ミカン」として普及していく。中島ミカンが隆盛を極めるのは、戦後の高度成長による大衆消費社会の成立による。

網野が二回目に訪ねた一九六五年は、忽那諸島の各島の農協が合併して、中島農協が成立した時であり、ミカン作が絶頂期をむかえていた。この年中島、睦月島、野忽那島、怒和島、津和地島、二神島が一つの農協になり、ミカンの中島ブランドが成立したのである。二神島は一九四八年にミカンの出荷組合が出来て、一九六二年には他の島に先駆けて中島農協に合併している。二神島と中島は隣りの島であった。一九六八年には中島農協は中島青果農協と改組されて青果連に加入し、忽那諸島にミカン中心の産業構造が確立した時である。

以上、三回の二神島調査から、中島ミカンの聞き取りを通して、私の瀬戸内海共同調査の方向性が固まった。近現代の島々に広がったミカン作の盛衰を通して、島の人びとの暮らしの変貌を明らかにすることである。そのためには、①ミカンの木は忽那諸島、中島に入る前どこから来たのか、ミカンのルーツを知ること。②ミカンと海の関係、ミカンは海を通して関西市場などとつながっている。ミカンはどこへ行くのか。③ミカンは人びとの暮らしをどう変えたのか。忽那諸島の生業は島によっ

て異なる。漁業、畑（タマネギ、生姜）、田の経済構造は、ミカン導入によってどう変化したのか。ここでは忽那諸島の島々を対象に瀬戸内海のミカンの近現代史にこだわってみたい。

さらに私は忽那諸島の人びとのオーラルヒストリーを通して、瀬戸内海のミカンの歴史を個人史のレベルから明らかにしてみたい。歴史は単なる過去を訪ねて、栄華の跡を懐かしむだけでなく、現状との厳しい緊張関係のなかで、現代ときり結ぶような研究ができなければならない。歴史は過去を美化することでない。地方産業の危機と地域崩壊の現場に立って、過去の歴史を訪ね、人びとの話を聞き、まとめることが、それらの人びとに未来の展望をあたえるような研究であることをめざしたい。

なお愛媛中島町のミカン研究は、これまでに村上節太郎「愛媛県の果樹栽培地域の地理学的研究(1)分布と発達について」『愛媛大学紀要第四部社会科学 Vol 1、No 2』一九五一年、桐野忠兵衛編『愛媛県果樹園芸史』愛媛県青果農業協同組合連合会、一九六八年、窪田重治『愛媛の果樹産地の形成とその変容』青葉図書、一九九〇年など、すでにすぐれた研究がある。近年では瀬戸内海の離島研究は進み、武田尚子『瀬戸内海離島社会の変容――「産業の時間」と「むらの時間」のコンフリクト』（御茶の水書房、二〇一〇年）などすぐれた実証研究が出されている。これは広島県沼隈郡内海町（現福山市）の横島、田島を対象とした漁村社会の昭和史の変貌を明らかにしたもので、社会学的アプローチによる。昭和の時代の漁業分解を「産業の時間」（工業化）と「むらの時間」のコンフリクトとして描き、近代化・工業化の中で解体される漁村の中でしぶとく再生される「むら」社会（共同体）を、社会学的及び民俗学的方法を駆使して描く秀逸な著作である。しかし、高度成長の中で解体される漁村でなく急成長する瀬戸内海ミカンの時代もあったことも忘れてはならない。本論文では高度成長が、離島を豊かなミカンの島に変貌させたことを描くと同時に高度成長後の島の衰退の要因も考えてみたい。

さらに山口徹編『瀬戸内諸島と海の道』（吉川弘文館、二〇〇一年）も瀬戸内海諸島を考えるために方法的に貴重な著作である。ここで山口は、島に橋がかけられる以前の瀬戸内海の島々を、「海を行き交う情報をとらえる目を持ち、ときには時代の流れをさき取りしながら、生業や生活を変えて行く進取の気風に富んだ地域であった」「成立の時期も事情も性格も異なる島々の集落が海を媒介とした結びつた社会はつねに流動的であり、開放的な面を持っている。それゆえ進取の気風をもった村は島民を緊縛する力は弱く、島民の帰属意識は薄い」とする。[1] 海を媒介として結びついた瀬戸内海の島々を、土地を媒介として結びついた強い排他性をともなう農村社会の帰属意識の強さと比較している。このような山口の視点は漁業より農業が進歩であるという思考（狩猟採集から農業革命へ）とは異なり、船を持って海を縦横に行き交う漁民（海民）の開放性と進取性をもつ島社会の意義を認めようとする姿勢が見られる。これは日本常民文化研究所と深い関係を持った網野善彦の史学とも通底するものであろう。

本論文はこれらを参照しながら、上に述べた問題意識のもとに中島ミカンの近現代史をたどってみたい。

I　忽那七島の経済構造

忽那七島は、明治の町村合併で、中島に東中島村と西中島村の二村が成立し、怒和島、津和地島、二神島の三島が神和村に統合し、睦月島、野忽那島二島は睦野村になる（図1）。戦後の町村合併で、一九五二年（昭和二十七年）東中島村が忽那諸島では初めて町制施行して中島町となり、一九五九年　神和村、一九六〇年　睦野村、一九六三年　西中島村を編入して忽那諸島はすべて中島町となった。二〇〇五年（平成十七年）に北条市とともに松山市へ編入され、中島町は自治体としての歴史を閉じる。

図１　忽那諸島　〔出典〕『新編温泉郡史』（椿南松田卯太郎編、1916 年）

表１　忽那諸島の面積と人口（1975 年）

	面積（㎢）	人口（人）	世帯数
中島	21.60	6665	1889
怒和島	4.77	1137	330
睦月島	3.81	945	294
津和地島	2.89	887	279
二神島	2.14	467	162
野忽那島	0.92	360	157
合計	36.13	10461	3111

〔出典〕『中島町統計書』（1980 年版）

表１に見るように、忽那諸島は中島、怒和島、睦月島、津和島、二神島、野忽那島、由利島の七つで構成され、人が住んでいるのは由利島を除いた六島である。その中で面積、人口とも最大の島が中島である。面積では約六割、人口では六割を超える。人口数は面積の大きさと比例しており、中島、怒和、睦月、津和地、二神、野忽那の順に少なくなる。さらに周辺の小さな無人島二二が中島町を構成している。近世からいわゆる忽那七島といわれるのは由利島を除いて、中島、睦月島、津和地島、二神島、野忽那島の六島に、興居島を加えたものである。

戦前と戦後の人口変化を一九一四年（大正三年）と一九七五年を比較すると、中島では一六三二戸から一八八九戸と約二五〇戸増加し、二神島では同時期に一六八戸から一六二戸とほぼ変化がない。戦前と比較すると中島の人口増加が著しいことが分かる。

しかし、戦後の人口は戦争直後、復員・引き揚げなど産業解体の結果大幅な帰農者の増加となるが、一九五五年の高度成長からは逆に都市部への人口流失が続き、人口は基本的に減少傾向にある。中島町（忽那七島全域）では一九四五年一万七八二八人が一九六五年に一万三九四五人へと三八八三人減少し二一％の減少率である。高度成長による都市部への流失であり、離島である忽那諸島では愛媛県松山市に転出するか、広島県・山口県へ、さらには京阪神へと若年層が流失した。

とくに一九六五年から津和地、二神、野忽那の三島では出生率が死亡率を下回る自然減少となり、一九六六年に怒和も自然減少となった[2]。忽那七島中で陸に近い中島・睦月島と比較して、交通の不便な離島から人

口流失が始まるといえる。一九二〇年から一九六五年の人口減少率では東中島地区一一六・八％、西中島地区九六・七％、睦野地区（睦月島・野忽那島）八六・七％、神和地区（怒和島・津和地島、二神島）八二・四％である。[3] すなわち一九六〇年代に二神島・怒和島・津和地島を先頭に人口減少が急速に広がっている。その中でもっとも減少の激しいのは二神島である。一九六〇年から六五年まで年間減少率二、九％と忽那諸島の中で最大である。

表2を見ると、一九六〇年から一九七三年石油危機までの高度成長期、さらにその後の低成長期、バブル経済をまで、忽那諸島を領域とする中島町では第一次産業が六七～六八％を占めており三十年間ほとんど変化がない。鉱工業の第二次産業は五～六％とわずかであり、第三次産業の商業・金融・サービス業が二五～六％を占め、これも変化がない。このように一九六〇年の高度成長期から三十年間、人口流出にもかかわらず忽那諸島の産業構成はほとんど変わらなかったといえる。普通この期間は第一次産業が急速に低下し、第二次、第三次産業が急速に拡大する。忽那諸島ではミカン生産が発展し、第一次産業が基盤を維持し続けたことを意味する。高度成長期の選択的拡大政策の成功事例といえる。

表２　中島町の産業構成（％）

	1960 年	1975 年	1990 年
第１次産業	67.3	68.2	68.5
第２次産業	6.6	6.1	5.4
第３次産業	26.1	25.7	26.1
合計	100.0	100.0	100.0

〔出典〕前掲『中島町統計書』1980 年、『中島町町勢要覧』1997 年

しかし一九九〇年代以後、果物消費の多様化・高度化とオレンジの自由化によりミカン作は衰退し、成長の時代が終焉するのである。

第三次産業として忽那諸島での特色は、睦月島、野忽那島での行商人の多さである。睦野村は、一戸当たり耕地狭隘で農耕に適さず、漁業も盛んでなく、工業立地も適さない、という過酷な条件があり、島を拠点とした全国を渡り歩く商業活動が盛んとなった。とりわけ睦月島は行商の島として全国に北は北海道、南は奄美大島、海外では朝鮮まで行き、最盛期には島の三分の一が行商に出たという。[4]

忽那諸島の行商の歴史的背景は、江戸時代、帆船による瀬戸内海中央部を航行する「沖乗り」ルートに近く、十九世紀以降は牛船、薪船、芋船、炭船が行きかった。とりわけ睦月島の港は「汐待ち」「風待ち」の船舶の避難場所として使われていた。この船舶に対して伝馬船で「沖売り」と称して食料品、薪、手織りの反物を売りつける商売が行商の起源となったという。その中で睦月の沖売りは幕末から明治の初期に島内の家内副業として盛んであった伊予絣の手織り反物を販売したという。睦月行商は「縞売り」と呼ばれ、木綿反物を黒く縞に染めたものが評判になったためである。睦月行商の本格化は一八八〇年代といわれ、明治中期からである。このころには伝馬船から大型の帆船を使用するようになり「縞売り船」と呼ばれ、島寄港船だけでなく、瀬戸内海（広島・山口）に商売を広げていった。

明治末で睦月の行商は二百数十名に達するという。しかもその半数は女性である。島の女性が縞を織り、縞を売り歩く睦月女が評判になったという。[5]

行商船は普通家族五－六人乗りで、標準は六尋船といわれる船長一〇メートルの帆船であり、旧暦三月から七月、秋は九月から十二月まで盆と正月を除いて半年間、船で生活した。

このような行商船は、昭和初頭に睦月島で三十隻以上あったという。この帆船は一九三〇年代になり次第に動力付きの機帆船に代わっていった。行商船の範囲は次第に広がり昭和になると、東は大阪、和歌山、岡山、徳島、香川、北は山口、広島、島根、鳥取、西は九州の宮崎、大分、福岡、佐賀、長崎（五島列島）、熊本、鹿児島、奄美諸島にまで、海を超えて対馬、朝鮮まで売りに行ったという。海と島をめぐる行商である。その範囲は国境を越えている。

表３　中島町の耕地利用状況（1953 年）

（%）

	睦野村	東中島村	西中島村	神和村
果樹	34.3	37.8	34.4	21.3
穀類	32.4	33.3	33.9	36.5
甘藷	27.0	19.3	20.8	33.9
蔬菜	4.6	7.1	8.2	4.7
豆類	1.7	2.6	2.6	33.9
計	100.0	100.0	100.0	100.0

〔出典〕窪田重治『愛媛の果樹産地の形成とその変容』（青葉図書、1990 年）15 表、102 頁

表４　樹園地の割合（1970 年）

（ha）

	樹園地	田	畑	計
中島	949.87	3.465	7.89	961.225
怒和島	148.75	0.80	21.58	171.13
睦月島	155.18	0.12	0.88	156.18
津和地島	114.60	0	13.67	128.27
二神島	82.42	0	2.60	85.02
野忽那島	30.89	0.47	0.82	32.18
合計	1481.71	4.86	47.44	1533.75

〔出典〕前掲『中島町統計書』

このような行商の活動は反物売りとは異なるが、中島など他の忽那諸島でも見られ、のちに述べる中島ミカンの苗木を持ち込んだのもこのような島内の行商であった。睦月行商の瀬戸内海の海の販路は広島から愛媛のミカン産地八幡浜に及んでいる。このような海を通じた情報ルートの広がりが中島ミカン導入の背景にあったものと思う。

表３から中島町の耕地利用状況を見ると、戦後初期の果樹栽培の状況が分かる。果樹の割合は中島町四村で東中島村が三七・八％で最も多く、西中島村、睦野村が続き、神和村が最も少ない。果樹に続いて多いのは穀類であるが果樹とほぼ同じ面積である。あとは甘藷である。ここでも神和村で他村に比較して多い。果樹、穀類、甘藷が耕地を三分する状況であった。これがのちに見るように高度成長を経ると果樹作に一元化するようになる。穀類・甘藷生産という自給作物からミカンという商品作物に転換するのである。

表４から経営耕地の田畑と樹園地の割合を見る。年度は中島ミカン最盛期の一九七〇年の統計である。耕地種別では樹園地が全耕地の九七％を占める。樹園地の内容は、温州ミカンの割合が八〇％を占め、夏みかんが四％、その他の果樹が一六％である。田は中島に三haあるだけで他島にはほとんど存在しない。日本離島センターによる一九六九年調査では中島では〇・九haしか田はないという。[6] 畑は怒和と津和地に市場向けのタマネギ、スイカなどの栽培が若干みられるだけである。田も畑もほとんどミカンに転作された。島の経済はミカンが支えていたことが分かる。忽那諸島は戦後、「ミカンの島」となったのである。

実際、耕地に占める果樹園の比率は一九六六年で六一・六％、果樹園の中でミカン園の比率は九一・九％に達する。最大は睦月島で九八・五％、最低は二神島（由利島を含む）で八一・五％である。

睦月島のミカンが最大に割合を示す理由は、先に述べた行商との関係がある。睦月島の明治以降の行商の発展は昭和期には野忽那島に伝播し、戦時統制による壊滅の時代を経て、戦後再び復活し一九五五年の高度成長前まで、急激に行商利益は拡大した。

ただし戦後は水路ではなく陸路・鉄道を通しての行商である。行先は四国全域、九州、北海道などが多い。九州は北九州の炭鉱地に集中している。行商の品は反物から洋服・高級呉服の既製品の売り歩きに変化している。仕入れも京都の呉服商、東京・名古屋・岐阜の製造元に直接注文するようになっていく。しかしデパート、町ごとの洋品店が新規開店してくると行商の信用は衰退していった。この代わりに発展したのがミカン経営である。

睦野村では「行商の利益を果樹園の開墾と園地購入、および苗木植え付けに注ぎ込むことにより、柑橘栽培において他島と比べて飛躍的発展を遂げることができた」のである。[7]

ミカン畑の各島の比較を見ると、ミカン畑＝樹園地は中島が九五〇haで六四％を占め、一番の島ミカンの産地である。次いで睦月、怒和、津和地と続いて、二神島が最小の八二haである。ここでも中島のミカン生産の大きさがわかる。睦月島、怒和島、津和地島、二神島においてもミ

カン経営が中心であることは同じである。一九六〇年の中島町のミカン栽培面積は五反以上が二二・九％であり、県平均が一二・〇％であることと比較すると中島ミカン経営の規模の大きさがわかる。[8] 忽那島嶼部の耕地狭小のなかでも、傾斜地のミカン山の規模拡大は中島ミカンの隆盛の証しでもあろう。

中島町（忽那諸島）の専兼別農家の推移では、専業農家が一九六五年の五〇％から一九七五年四二％に減少しているが、一九七五年でも第一種兼業農家が三四・一％、第二種兼業農家が二三％と専業農家が一番多い。高度成長期はミカン専業農家により島経済が支えられていた。

戦前のミカン作が発展する以前の果物収入を見ると、一九一四年（大正三年）では中島（東中島村・西中島村）では四〇四五円で、全収入の三％を占めるに過ぎない。大正昭和期のミカン樹園地の開墾とミカン収入の激増ぶりに驚く。[9]

中島港の移出取扱貨物を見ると最大が果物・野菜（ミカン）で二万九二四七トン、二番が三〇五一トンの輸送機械（大浦造船所の船舶）であり一〇倍の差がある。[10] 果物・野菜の移出量全体に占める割合は七六％である。ほぼ中島港はミカンの移出港であったことが分かる。移出先を見ると大阪、神戸、尾道、尼崎、松山、呉と海上輸送によるものである。阪神地方から岡山、広島にミカンが移出されたものと思う。

漁業に関しては表5から見ることができる。全世帯が三一一一であるから漁業経営体が六〇一あるということは五分の一の世帯、約二〇％が漁船を所有していることになる。島の漁船所有率では中島がやはり多いが、全体の三六％であり世帯割合が六〇％と比較すると少ない。二神島は中島に次ぎ、ほぼ怒和島と匹敵する漁業経営体がある。二神島は世帯数の割合は五％であるが動力漁船の所有率は全島の約二〇％と、漁業の占める位置が大きいと思われる。しかし漁獲金高においては、島の単位経営体比較では中島を最低としてそれに次いで二神島である。怒和島が一九六円ともっとも漁業収益が高い。怒和島、津和地島の漁獲高は比較的大きいが、二神島は経営規模が零細であることを示している。と言っても一経営当たり一五〇円程度の漁獲金高では、漁業収入は微々たるもので自給生産としての意義を超えない。[11]

西中島の大正初年の漁業は「本村に於ける漁業亦の農家の耕作余暇を以て之れに従事するものにして、すなわち漁期きたるあらば鋤鍬を棄てて海に奔り、農事繁ならば横網を置いて野に出づる」状況であった。[12] 戦前以来島の漁業は生業として行われていた。

各島の漁業高は帳簿に残らない取引、税金関係で正確な統計がないので市場向けにどれほど販売されていたか正確にはわからない。中島町には戦後九つの漁協があった。二神、西中島、神浦、東中島、睦月、野忽那、津和地、上怒和、元怒である。神浦を西中島に、上怒和と元怒和と一つとすると七漁協となり七農協に対応する。

この前提として戦前以来、一九〇一年（明治三十四年）に制定された漁業法により、漁業権の確定のもとに各地域に漁業組合が設立されたことがある。二神漁業組合は一九〇三年、忽那諸島では最も早く設立され、津和地、怒和地の一九一七年設立と比べると十五年も早くその先駆性は際立っている。この背景には由利島をめぐる二神

表5　漁業（1978年）

	経営体数	漁船（隻）			従事者数	漁獲金高	1経営体平均
		無動力	船外機	動力	人	円	円
中島	219	5	10	176	322	26,723	114
怒和島	104	1	4	101	224	18,128	196
睦月島	33	1	25	9	57	5,495	167
津和地島	94	0	0	102	213	16,279	173
二神島	101	13	6	88	205	13,064	129
野忽那島	50	2	12	38	72	5,011	100
合計	601	22	57	514	1093	84700	

〔出典〕前掲『中島町統計書』

島漁民と高浜町新刈屋漁民との漁業権の争いがあった。これは二神の代々庄屋を務め、明治の二神部落総代となり同時に二神漁業組合長となった二神仲次郎が、由利島の漁業権専有権を県に訴えて、一九〇七年二神の漁業占有権が認められる裁定が下り、一九一二年から実行されている。[13] こうして二神島では、近世から近隣ではイワシを中心とする豊かな漁場であった由利島の漁業権を獲得した後、一九二二年から由利島でイワシの地引網が始まり、昭和初頭からは無人となっていた由利島に夏季七月から十月までの三か月間島に宿泊施設を建て、巾着網によるイワシ漁が、男四十人、女四十人が島に泊まり込んで、共同漁労によって毎年大きな収益をあげるようになった。その意味で二神漁業は近代においても先駆的な活動を示していた。

戦後の忽那諸島では、『中島町誌』によると、一九六〇年代二神島が漁獲高一億円で首位であるとしている。次いで怒和が九五〇〇万円、津和地、西中島が七〇〇〇～八〇〇〇万円、あとは睦月、野忽那、東中島一〇〇〇万円という。[14] 首位の二神の一億円を一六二世帯で割ると一世帯当たり六〇万円になる。農家所得年間五八四万円（一九六〇年）と比べるとその一割に相当する。

戦前の漁業が盛んであった二神島を含む神和村の漁業収入と比較すると、一九一四年（大正三年）では漁獲物収入八万五三七〇円で全収入の約四割五分に達していた。[15] しかし戦後の漁業収入の割合は、戦前の二割から一割に低下している。その分ミカン収益の比率が高まったのである。戦後の漁業所得低下と島ミカン拡大の意味を理解することができよう。

すなわち中島を中心とする忽那諸島は、ミカン経営を中心に生業を立てる世帯が多いことが理解できよう。ただ島の差として、二神島、怒和島、津和地島はミカンとともに、漁業へも経営基盤を置く世帯があることを留意したい。

以上から、戦後忽那諸島における戦後ミカン経営の意義を理解することができる。以下、中島本島を中心に戦後中島ミカンの発展の軌跡をたどる。

Ⅱ　戦前中島ミカンの発展

1　中島へのミカン導入

中島のミカンは、愛媛県では北宇和郡吉田町立間とともに近代の温州ミカン栽培としてはもっとも古い歴史を持つという。『愛媛県果樹園芸史』によれば、中島にミカンが初めて導入されたのは大浦の森田六太郎（一八五四～一九〇五年）が和歌山より温州ミカンの苗木百本を購入して植えた一八八七年（明治二十年）のことだという[16]（写真1）。これを東中島村初代村長堀内唯八郎が奨励し中島に広まったという。また『中島町誌』によれば森田の導入時期は一八七二（明治五）年という。[17] また同書には森田六太郎の父六郎太郎が、数種の在来ミカンを試植しその中の「リュウジン」言われるミカン一樹は、一畝歩に広がり三五〇貫のミカン収穫を得たという。後年これを息子六太郎に引き継いだという。ここで言う「リュウジン」とはのちに述べるように温州ミカンのことである。

このように中島大浦の温州ミカンの伝来は、在来の「リュウジン」の試植なら江戸末期から明治初期になるし、和歌山伝来なら明治中期になる。ただ六太郎の和歌山の温州ミカン苗木百本のコヤゴサコ畑一反への移植は、一八八七年と一八七二年の二説があり不明である。一八七二年なら六太郎十八歳、一八八七年なら三十三歳である。

さらに、その後西中島村吉木の村長忽那恕（くつなだむ）が温州ミカンの熱心な唱道者で、一九〇〇年にミカンを移植して、中島ミカンの今日の隆盛を作ったという。[18] 忽那恕は中世の「海の領主」忽那一族の末裔である。

愛媛への温州ミカンの最初の導入の経緯は、一八六一年（文久一年）

写真１　中島ミカン山から大浦を望む　（筆者撮影）

立間の加賀山平次郎が四国遍路の途中、紀州有田に立ち寄りミカンの苗木八本を手に入れて、故郷の立間白井谷に植えたのが、愛媛温州ミカンの発祥と言われる。[19] 別の本によると一八七三（明治六年）、立間の加賀山金平が紀州有田の苗木を兵庫県河辺郡東野村の植木商から購入し栽培し、一八八四年（明治十七年）に東京で第十回全国重要農産物共進会に出品して一等賞を取ったことにより一躍全国で注目されたという。[20] この温州ミカンは明治初年には北宇和郡一帯に広がっていた。これによると温州ミカンの苗木は和歌山から愛媛に伝来したことになる。

この時の温州ミカンは、地元では「リウリン」と呼ばれた。また伊予同業組合の古老の話では「リウジン」と呼ばれたという。温州からこのミカンの苗木を持ってきた李夫人（リフジン）が訛ったものであり、当時温州ミカンとは言わなかった。[21] この時のリウジンの木は百五十年以上経っていた古木で、それを接ぎ木したものが普及したという。この話では伊予郡砥部町に江戸時代の後期から、温州ミカンの木があったことになる。

中島ミカンの導入経緯については、先の東中島村大浦の森田六太郎説の他、一八八四年（明治十七年）ごろ越智郡森口村の松岡梅吉が広島県御調郡と豊田郡から苗木を購入して栽培したのが始まりという。この苗木が越智郡島嶼部に広がったともいう。

中島以外への忽那諸島へのミカン苗の伝播は、怒和島は一九〇一年、二神島は一九〇二年、睦野島は一九〇七年広島県大長から苗木を導入したと言われる。広島県大長は、呉の沖合で瀬戸内海に位置する大島下島の集落で、「ミカンの島」としてミカンの主産地であった。大長では、隣りの岡島村関前に船で海を渡って出作する「渡り作」が盛んであったという。広島県から島伝いにミカンの苗木が忽那諸島に伝わったのである。これによると中島ミカンのルーツは広島県からの伝来したことになる。中島のミカンのルーツは和歌山、広島の南北二つルートがあること

になる。

以上から中島への導入は明治中期に和歌山、広島から、また江戸時代からの中予（伊予郡砥部町）からの地元ルートも含めると、三つの可能性があることになる。

その後、温州ミカンは一九〇〇年代（明治三十年代）から日本で全国的普及が始まり、産地としては、一九三五年まで和歌山県が栽培面積では第一位の座を保っていた。紀伊国屋文左衛門のミカン船伝説で有名なように紀州ミカンは江戸時代以来の特産品である。江戸初期のミカンは温州ミカンとは異なり、小ミカンといい温州ミカンより小ぶりであった。

一九〇五年、愛媛温州ミカンは全国十七位の位置にあり、まだ後進県であった。その後ミカン県として愛媛が躍進し、一九三五年に和歌山、静岡に次いで第三位になり、一九五〇年には和歌山を抜いて愛媛が第二位、一九六五年には静岡を追い抜いて全国第一位に躍り出る。一九六〇年代になると長崎、佐賀、熊本、大分、福岡、鹿児島などの九州勢が台頭し愛媛ミカン王国を脅かすようになる。戦前（一九二五年）第四位につけていた神奈川県は戦後九州の新興諸県に抜かれて、一九六五年には十三位に後退した[22]。ミカンは南方の暖かい地方の産物であり、神奈川県はミカンの北限とも言われ、酸味が強く西南日本のミカンに太刀打ちできなかった。

日清戦争後の産業革命以降、中島では明治農政による官主導で、ミカンを主体とした果樹作が発展した。明治中期、当初の温州ミカンの中島での導入には家畜商・木綿商という商人層が大きな役割を果たしたという[23]。森田六太郎は木綿縞の行商であるという[24]。和歌山あたりのミカンの隆盛の情報を得た商人たちが、ミカンの苗木を中島の地に導入したという。さらに和牛取引の商人たちが中島に来村し、その資力で島の地主からミカン畑を購入したという。さらに村内の指導層であった耕作地主層（自作兼山林地主）が積極的にミカン栽培に動いた。最初、中島ミカンは商人（行商）と林を所有する耕作地主と自作農上層の導入に限定されていたが、第一次大戦後に中農層から下に普及する。

なお、東中島村の地主制の展開については一九〇九年（明治四十二年）で耕作地三四六町歩、小作地率七・八％であり、ほとんど地主・小作分解が見られず自作農が多い[25]。傾斜地を所有する山林地主と自作農上層が村落の中心を担っていたと思われる。

また一八九九（明治三十二）年に東中島村の堀内唯八郎がアメリカのネーブル導入を図ったという。しかし温州ミカンには太刀打ちできなかった。これが中島の普及した温州ミカン伝来の経緯であるという。

しかし、忽那諸島南部の中島へのミカン伝来が行商による和歌山からの苗木導入であるのに対して、忽那諸島西部の津和地島のミカン伝来の言い伝えでは、一九〇二年（明治三十五年）ごろにミカンの苗木を広島県大長町から来た大亀某という商人から買い受けたという。その五年後には怒和島に、松山市久米村の仙波八三郎という男がミカンの苗木を持ってきたという[26]。明治後半になると広島県と愛媛県からミカンの導入が瀬戸内沿岸から普及するようになったようだ。島ミカンは明治初年の和歌山伝来から一元的に普及したものではなく、明治中期から広島県産の苗木なども入ってきており複数のルートがあったと思われる。

もともと中島は六世紀の安閑天皇の時代に長師に朝廷の放牧場が設置され馬・牛を天皇に献上する土地であった。このため愛媛県は最古の畜産地であると言われる。その後の商業的農牧業の普及は早く、江戸時代から大洲藩の牧馬・牧牛の地として和牛飼育が盛んな土地であった。明治になり、和牛子牛肥育から乳牛の導入も始まる。明治中期には乳牛の導入とともにその厩肥を利用してショウガの栽培も広まり、一九一〇年代第一次世界大戦期の好景気のなかでショウガの衰微に代わり、タマネギ、除虫菊の栽培熱が忽那諸島に持ち込まれた。また中島では山林を数反各戸が所有して薪炭を作り、四国本土の三津浜へ移出した。また家内

工業として木綿縞の生産は江戸時代からの重要な副業であった。その他の諸島ではとりわけ漁期には漁師として活動を行い、副業として漁業収入が補足した。このような多様な副業経営の展開は、耕作面積において二反未満が五五～六五％とかなり高い島嶼部特有の耕地狭小の条件が影響していた。商業的農業の一つとしてミカン山の果樹栽培も、中島に適した副業の一つであったのである。

とりわけ、そのなかでもミカンは、中島の代表的な商品作物として、それまでのショウガと乳牛を組み合わせた農業経営を解体させ、大正中期から昭和初頭の発展を経て専業化し、戦後の高度成長期に飛躍的に成長し定着した。戦後の高度成長期に中島のみならず忽那諸島はすべてミカン栽培が普及し、忽那七島はほぼミカン栽培に一元化する農業経営構造の大変革をもたらした。

明治期に中島でのミカン経営者として、本格的に開墾によって経営規模を拡大したのは一九〇七年大浦の俊成徳太郎であるという[27]。泰の山（二八九m）の山頂にミカン園を開墾した。泰の山は中世忽那氏の拠点である中島畑里の泰山城跡である。近代に中世忽那一族の村長忽那恕のミカン栽培指導と泰の山ミカン園の開発というように忽那一族と忽那城がミカン普及にかかわっていることに歴史の重みを感じることができよう。とくに一九一〇年代から一九三〇年にかけて中島町では海辺の傾斜地、山の傾斜地がどんどん開墾された。猛烈な勢いで山林がミカン園になったのである。

一九二一年調査（愛媛県温泉郡勢）によると、果樹作では四国本土温泉郡全体はナシが五四％と最大で、ミカンは二五％であるのに対して、中島では七四％がミカンである。島嶼部の中島が戦前からミカン栽培に特化していったことがわかる。

一九二五年の愛媛県の町村別柑橘栽培面積では中島町は北宇和郡立間村、西宇和郡三崎村二次いで第三位の栽培面積になっている[28]。県内三大産地を形成したのである。

愛媛ミカンが果樹栽培で飛躍したのは、第一次世界大戦期の好景気による消費ブームと昭和恐慌後の二つの画期がある。第一次大戦後は養蚕景気もあり、果樹作ではナシの方が好調でミカンは出遅れていた。南予の養蚕、東中予のナシと言われた。しかし大正末から昭和の初めにナシはヒメクイムシの大被害に遭い、さらに昭和恐慌の生糸価格の暴落による養蚕不況で、愛媛ではミカンが一気に商品作物として注目され急速に発展する。南予で桑畑がミカン畑に転作され、東中予でナシがミカンに転作されたのはこの時である。とくに昭和恐慌対策として政府が打ち出した救農土木事業では、愛媛県ではほとんどがミカン開墾に当てられたという[29]。桑畑からミカン畑への転換は、混植を経てミカンの長期結果を待ちながら緩やかに進行したことが成功の原因であった。商品作物である桑畑・養蚕経営農家が新たな商業的農業としてのミカン経営に移行していったのである。

2　戦前中島ミカンの出荷

江戸時代から中島は仔牛を牛船で京阪地方に運送する海運事業に従事する者が多かった。近代になっても中島の小浜の牛馬商は、阪神のみならず三津、呉、馬関から南予、九州、朝鮮に出入りして畜牛の売買をしたという。瀬戸内海を通しての海上交易は活発であった。ミカンの隆盛はこの伝統的な交通路に乗って発展した（図2）。

一九〇〇年代に中島を中心としてミカン栽培が盛んになると、ミカンは定期船で三津浜に送られ三津浜商人により販売されていった。一九〇六年（明治三十九年）三津浜に果物市場株式会社が成立している。三津浜商人が忽那諸島のミカンを買い付けて市場株式会社に出荷、売却した。まだ生産者による出荷組合ができる前である。

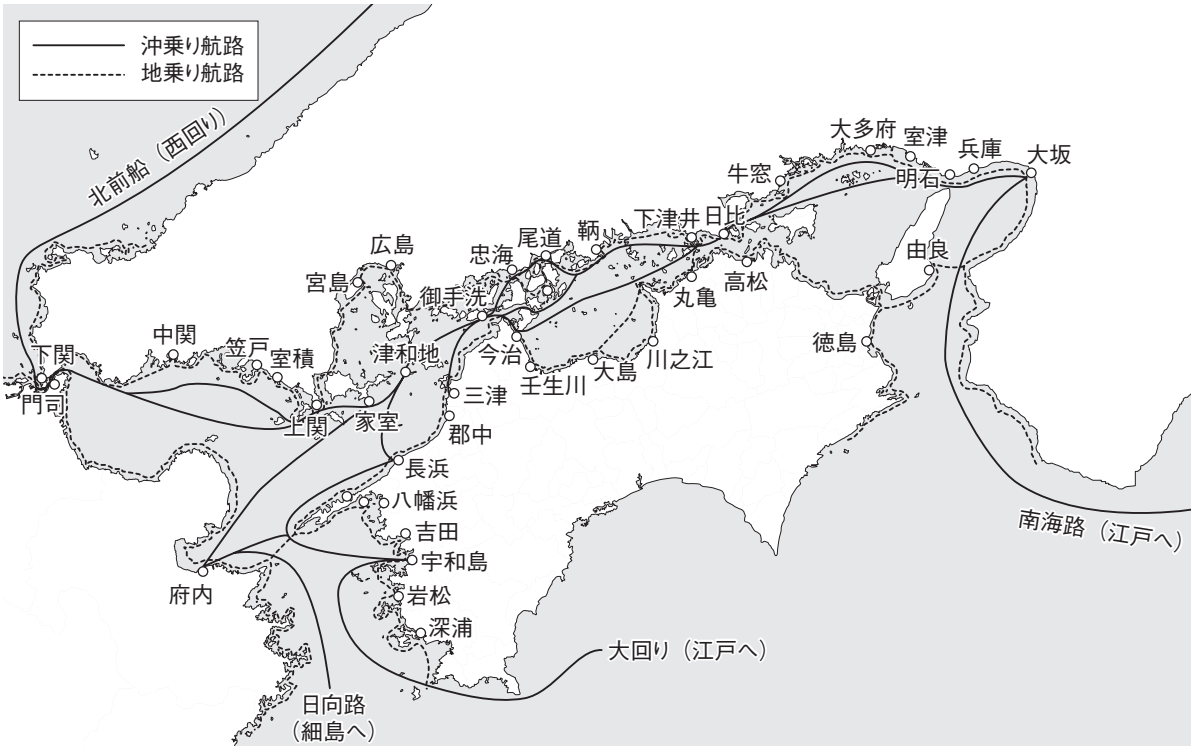


図２　瀬戸内海航路図　〔出典〕『愛媛県史、近世下』14巻235頁を元に作図

なお、津和地では一八八〇年代（明治二十年代）から津和地商人が北宇和郡のミカン主産地の積出港、吉田にミカン船を回したという。愛媛ミカンが有名になるまでは紀州商人が最初にミカン船を吉田に回し紀州ミカンとして販売したという。海の商人はミカンが盛んになると広島から阪神地方に船で輸送したという。[30]

もう一つの形態は忽那諸島の部落商人がミカン農家から買い取り――これを「山売り」と言った――県外に直接販売する場合と島に入港するミカン船に売り渡す場合――これを「浜売り」と言った――があった。後者の方が一般的であったという。前者の場合は部落問屋が帆船を雇船して搬出し阪神地方から関門に至る瀬戸内海の諸都市に売りさばくのである。[31]この部落問屋は通常の商人資本ではなく、部落の公認問屋として部落で人選して指名決定する。さらに一年間の営業許可の上で収益の一定部分を寄付することが義務付けられている。手数料も部落で決められている。部落の共同体規制が強力に働いているのである。島外部の商人の介在がなく、ミカン生産農家が部落の持ち回りで商人的役割を果たしていたといえよう。この意味で島特有の商人形態であった。

中島での生産者による共同出荷は愛媛県ではもっとも早く一九〇六年に中予温泉郡中島で共同出荷が開始されたことが記録されている。これは規約もなく中島大浦の木村昌平、島田茂一郎を中心に有志が相談の上共同出荷したものであった。[32]最初は機帆船に百八十箱のミカンを積んで神戸市場の同郷者に売ったもので、商人への浜売りに対して三倍の値段で売れたという。これは部落による「山売り」の延長として考えられる。

これに対して愛媛ミカン発祥の地である南予北宇和郡立間村の共同集荷は、一九一〇年であるから、それより四年も前である。[33]立間（吉田町）のミカンは地元商人資本（産地問屋）や外部のミカン船の買い付けなど伝統商人の力が強く生産者の共同集荷は遅れたものと思われる。

また、当時、農会も産業組合とならんで二大農業団体として、農業指

導に大きな役割を果たす。農産物販売斡旋活動として販路指導、調査を行い、指導員を現地に派遣し調査指導した。しかし農会は米麦中心で果樹についてはそれほど熱心ではない。愛媛県においては一九三一年県庁に農産物配給販売斡旋部を設置して販路拡大に努めている。大阪、東京、九州に駐在員を派遣し戦後の愛媛県青果連による市場駐在制度の前身となっている。また、県外出荷には全県的に出荷調整、出荷協定を行った。

一九三二年に産業組合とその傘下の出荷組合では、容器、荷造りを統一し、ブランド化を図り、等級も「天特伊予のみかむ」という七つに規格化した。

表6から戦前愛媛県全体のミカン出荷組合の年次別設立状況を見る。郡別合計で見るように温泉郡の出荷組合数が五五と多く四〇％を占める。次いで越智郡の二六、伊予郡の二五であり、中東予で七九％に達する。それに対してミカン発祥地である宇和郡の低さが目に付く。宇和郡で九、西宇和郡で二〇である。全体の二一％である。販路において生産者主導の中東予に対して、商人主導の南予の対比が明らかに見られる。また設立年次では一九二六～二八年の三年間に集中していることが分かる。大正から昭和初頭のミカン作の発展と産業組合法にもとづくミカンの共同販売開始に対応しているものと思われる。

このような生産者による下からの自発的共同出荷が産業組合のミカンの共同販売に結びついたのである。しかしその動きは中東予では生産者主導で順調に推移したが、南予では同業組合が商人と生産者の混合であったため生産者の直接共同販売は大きな抵抗に遭う。同業組合内部は商人を中心に反対が多く分裂状態に陥る。商人と生産者が対立し、産業組合法にもとづき販売組合は生産者のみによって設立されることになった。のちに述べるように、これはその後産業組合運動と反産業組合運動の対立に発展する。

中島ミカンの発展と販路拡大に貢献した人物として先に述べた島田茂一郎がいる。彼は一八八三年東中島村生まれで、一九一九年東中島村・西中島村農会技術指導員となり、一九三七年東中島村農会長となる。以後二十

表6　郡別出荷組合設立状況

	温泉郡	伊予郡	宇和郡	西宇和郡	越智郡	計
1912年						
1913年						
1914年	1					1
1915年						
1916年	1	2				3
1917年	1	1				2
1918年	2	1		1		4
1919年	2	1				3
1920年	1					1
1921年	2					2
1922年	2	1		1		4
1923年		5		2	2	9
1924年	1	3				4
1925年	1	1		2	1	5
1926年	2			3	3	8
1927年	4	3		5	4	16
1928年	16		2		11	29
1929年	15	3				18
1930年	2	1	4		2	9
1931年	1	1	1	4	3	10
1932年	1	1		1		3
1933年		1	2	1		4
計	55	25	9	20	26	135

〔出典〕『愛媛県果樹園芸史』表3-24、195頁による。

写真２　島田茂一郎翁の碑　（筆者撮影　2010年）

表7　中島出荷組合（1930年）

組合名	区域	組合数
睦月	睦月	87
大和	野忽那	24
朝日	大浦	24
高山	小浜	180
鎧掛	長師	110
天神	宮野	45
明魁	神浦	48
宇和間	宇和間	71
熊田	熊田	53
千歳	吉木	35
明穂	饒	33
丸畑	畑里	46
桑名	栗井	20
曙	上怒和	27
二名	元怒和	46
松島	二神	63
津光	津和地	27
計		939

〔出典〕前掲『愛媛の果樹産地の形成とその変容』92頁。
〔注〕原資料は『伊予のくだもの』（伊予果物同業組合、1932年）による。

年間にわたりミカン栽培の指導・普及に一生をささげた。彼の記念碑がJAえひめ中央農協中島支所の前に建てられている（写真2）。

島田茂一郎は、一九〇七年ごろ誤って折損し切除した枝からミカンの整技剪定を生産技術として確立普及した農業技術者である。また一九三八、九年の新技術によってミカンの隔年結果防止が完成し、中島ミカンはいち早くみかん主産地の地位を築くことが出来た。その業績により島田茂一郎は「蜜柑の神様」と呼ばれた。

さらに彼は、山田友太郎、倉岡金次郎、木村庄平らといち早く出荷組合結成に動き、一九一六（大正五）年に「朝日組合」を組織し、ミカン市場開拓においても神戸市場、大阪市場にも販路を広げた。一九三二年の出荷実績では朝日組合は四万四五五〇箱で伊予果物同業組合内の第一位となっている。二位とは倍以上の差をつけていた。[34]

表7に見るように部落出荷組合は十七組合が結成された。昭和初頭にミカン出荷組合員は九三九人、最大は東中島村小浜の高山組合である。最少は同村栗井の桑名組合である。二神は松島組合六三人で中規模組合である。村別に集計すると東中島村六四二人、西中島村二三人、睦野村一一一人、神和村一六三人である。

一九一三年に結成された伊予果物同業組合に加盟し、中島ミカンの販路を島外に拡大していった。また中島で九組合にミカンの選別を共同で行う共選組合が結成され、二神島では松島組合で共選が行われた。

一九二九年には伊予購買販売組合設立とともに、伊予果物同業組合中島支所が大浦に設置され、忽那諸島全体の集荷統制の中心を担うことになった。出荷組合はそれまでと同様に同業組合の下部組織であり、産業組合の下部組織となった。

二神島の出荷組合、松島共撰組合の例では発足時の組合員は三〇戸ぐらいで、農家ごと庭先で選果機にかけてそれぞれ四箱から二十箱を木箱に詰めて、大浦から就航する機帆船に積み込んだという。しかし二神では船積みできる港がないので乗客用汽船に積んで中島大浦に回したという。[35]

しかし、一九二九年の二神島のミカン経営農家数は全体の二割に満たない。一九三五年に二神の共同出荷戸数は六三戸に増加するがそれでも二神島全島一六〇戸の四割であった。戦前のミカン農民は山を開墾できる資力を有する耕作地主から上層農民に限定されていたといえよう。二神島のミカン導入の遅れは中農層の薄さと関係していよう。

3　戦前中島ミカンの販路

戦前、愛媛ミカンの輸送は、船舶による海上輸送が基本であった。愛媛県の鉄道開通は遅く予讃線が高松から松山まで開通したのは一九二七年、南予の宇和島まで開通したのは一九四五年までかかる。このため南予のミカンはほぼ海上輸送であり、中予では昭和から一部鉄道輸送で松山、今治、高松から宇高連絡船で阪神、京浜市場に出荷するルートも開け、陸地部ミカン園では鉄道利用となったものが多い。しかし従来通りの松山市三津港から糸崎、神戸、大阪の定期船でミカン箱を運ぶことも続いた。この原因は機帆船輸送より鉄道運賃が高いことも原因であっ

た。とりわけ島嶼部の忽那諸島、大三島を中心とした島嶼部のミカン輸送は、現在の瀬戸内しまなみ海道を通って広島県の糸崎港を経て阪神、京浜市場へと鉄道輸送する方法が多く利用された。風のみの帆船から動力と付けた機帆船が登場するのは、静岡県が先駆で一九〇六年のことという。中島で機帆船が初めに登場するのは一九二五年中島栗井であったという。中島・栗井も先に述べた睦月島と同じく瀬戸内海「沖乗り」ルートから少し離れた「風待ち」「潮待ち」の港町である。このため早くから海運業が栄えたところである。ミカン船は帆船から機帆船に変わりながら忽那諸島のミカンを広島、阪神市場に運んでいたのである。

このように大正から昭和にかけては①島嶼部の各港から機帆船または定期船で神戸までの海路輸送、神戸で鉄道輸送に切り替えて東京まで、②島嶼部の各港から広島県糸崎まで海路輸送で、糸崎駅から鉄道輸送で神戸、東京まで、③予讃線で宇高連絡船を経て神戸、大阪、東京への三ルートがあったという。[36]

ミカンの市場拡大、販路開拓は、一九〇〇年同業組合法の制定により商品規格の統一が図られることによって広がった。同業組合の役割は輸移出検査、指導奨励、販売斡旋が三つの事業である。一九〇一年和歌山県の有田柑橘同業組合、静岡県の庵原郡柑橘同業組合をはじめとして先進県からミカンの同業組合が設置される。愛媛県では一九一三年に中予（松山市、温泉郡、伊予郡）の伊予同業組合、一九一四年南予（宇和島市、宇和郡）の宇和柑橘同業組合、一九一六年東予（今治市、越智郡）の越智同業組合が相次いで結成されている。大正初頭の一九一〇年代が愛媛における商品作物としてのミカン作発展の画期である。

また、松山・温泉郡の伊予同業組合が生産者のみを組合員として設立されているように、同業組合は地元商人（三津浜）に対抗するものでもあった。同業組合では個人出荷より便利として生産者の共同出荷を推奨した。一九二九年に伊予果物同業組合は産業組合法に基づき伊予果物購買販売組合を設立して生産者団体として活動を広げていった。これに対して、同じ一九二九年、産業組合法による宇和柑橘販売購買組合は同業組合の商人層による激しい反対に遭う。中予（温泉郡）と東予（越智郡）の果物同業組合が生産者のみであるのに対して、南予（宇和郡）の柑橘同業組合の組合員は商人と生産者が含まれる。生産者農民と商人の対立である。このように同業組合の中東予と南予の差異は大きい。

表8を見ると戦前中島ミカンの出荷先の割合がわかる。最大の出荷市場は大阪である。全体の六九％を占める。次いで神戸が二八％、朝鮮は二・五％である。阪神市場が圧倒的あり、朝鮮は少ない。これは戦時下の船舶輸送の関係もあり、一九三五年ごろはもっと多かったものと思われる。このように、中島ミカンの一九二九年での販路は、関門市場と阪神市場が二大市場である。満洲事変後に大陸出荷も始まり、朝鮮・満洲への出荷も急増した。一九三〇年代後半に優良品は阪神市場へ、良品は大陸市場へと振り分けられ二大市場が確立する。

表８　中島ミカン阪神朝鮮出荷総個数（1941 年）

	実数（個）	割合（％）
大阪	113,855	69.3
神戸	46,383	28.2
朝鮮	4,094	2.5
合計	164,332	100.0

〔出典〕『神和三島誌』（神和語り部の会、1989 年）239-240 頁より作成。

輸送方法は国内では中島ミカンの出荷は一〇〇％機帆船（発動船）であった。ただし陸地の伊予果物組合の出荷（一九三二年）では汽車三六％、汽船三一％、発動船三三％であったという。[37]

満洲への出荷は、各港から関門まで機帆船、または定期便で、そこで積み替えて大連まで定期便で送られた。朝鮮へは機帆船で釜山へ、釜山で鉄道に積み替えて京城へ、中国へは関門から青島航路、天津航路が利用された。満洲・朝鮮出荷の八割は伊予果物同業組合であったという。中島ミカンも戦前は伊予果物同業組合に加盟していたので三津浜、郡中港からミカンを大

陸に出荷したのである。朝鮮、大陸輸送では南予や和歌山、静岡より制内海を利用するため海路の有利が中予から島嶼部ミカンにあったのである。アジア・太平洋戦争の時期にミカン輸送は不要不急物資として輸送は次第に困難になったが、それでもミカン輸出は続けられた。

愛媛県農会技師の話では「伊予果物そのものも満鮮支の方への拡張がなかったら伊予果物はあれだけの発展はしておらなんだ」と言われるほど植民地支配の拡大の意義は大きかったのである。[38]

この時代、中島ミカンのような島嶼部のミカンは、陸地部のミカンより品質がよいとされて、販路においては、主に阪神市場、朝鮮（京城）市場に向けられた。これに対して陸地部のミカンは主に東京市・京都市場、大連市場に向けられたという。[39]

こうして中島ミカンは一九三四年ごろに「色と味において『日本一』なりとの名声を博する黄金時代を築き上げた」と言われている。[40]

一九三五年のミカン生産面積では、戦後の町村合併後（一九六六年）の吉田町の範囲では三三六ヘクタールであり、同じく中島町では三八九ヘクタールである。[41]愛媛ミカンの先進地を中島ミカンが凌駕したのである。

しかし、中島ミカンの絶頂期は長く続かなかった。一九四一年青果物配給統制規則により、ミカンも国家統制の対象品目となり、自由な出荷販売は出来なくなる。商人を中心とした同業組合および産業組合の販売組合は戦時統制組織に組み込まれていった。さらに一九四三年、四四年にはミカンは不要不急の作物として、食糧増産の掛け声のもとにイモ類などの食糧に強制転作がなされた。とくに愛媛県の相川勝六知事はミカンの整理伐採に熱心で農林省支持の一割減反に対して二割減反を強行したという。[42]愛媛ミカンは最盛期の一九四〇年から敗戦時の一九四五年にミカン栽培は半分に減少し見る影もなく衰退した。

Ⅲ　戦後の中島ミカン

1　中島ミカン戦後の発展

戦時下のミカン栽培の縮減のあと、敗戦直後に青果物統制は廃止され、復興と高度成長を経てミカン栽培は再び復活する。生産量では一九五二年、栽培面積では一九五六年に戦前水準を凌駕した。愛媛県では一九五五年の高度成長以後、年々一三〇〇ヘクタールの開墾・増殖が行われている。伊予柑も戦後急成長し、とくに中予（温泉郡・伊予郡）の特産品となる。一九六六年では中予が七二％、南予（宇和郡）が一六％、東予（越智郡）が一二％である。[43]戦前の島ミカンは温泉郡中島町が有名であるが、戦後の高度成長期には越智郡の島嶼部として、岡村島、大三島などが急成長する。岡村島の開前村は一九五〇年で一三一haもミカン園があるミカンの島であった。ここでは広島県に近く大長村の人が出作であった。大三島も戦後ミカン園は一〇三八ヘクタールに増殖する。

先に述べたように温泉郡の島嶼部、中島町は、戦後から一九六三年までに忽那諸島の全島四町村が合併し、一九六六年温州ミカン一二三七ヘクタールに達する純ミカンの島となった。戦前最盛期の中島四町村のミカンは三八九ヘクタールというから三倍の伸び率である。戦後は松山市となる陸地部のミカン増殖が進み同年一五四六ヘクタールと中島町を凌駕する大産地となる。

表9から戦後中島での温州ミカン栽培面積の拡大のスピードの速さに驚かされる。ミカンは一九五〇年から一九六三年にかけて三・四倍に伸びている。さらに伊予柑はこの間に三・五倍に伸びている。これらは海辺の傾斜地の山林開拓によるものである。とくに一九五五年から一九六〇年にかけての栽培面積の増加が著しい。戦後開拓によるミカン栽培地の急激な拡大を、高度成長の大衆購買力の増加が後押ししたのである。

一九六一年の農業基本法による政府の果樹、畜産、蔬菜など選択的拡大路線の波に乗り、果樹振興法と相まってミカン栽培は急成長した。一九七二年には中島町の温州ミカンの栽培面積は一三一一ヘクタールとなり最大を記録した。一九七七年には中島では水田が皆無になった。すべてミカンに転作されたためである。中島町では果樹作収入が農産物全販売の八割以上を超える農家はほぼ一〇〇％であった。中島町はミカン専業地帯となったのである。

これを支えたのは山林傾斜地の開墾であった。一九二一年一五七一ヘクタールあった山林が一九八〇年には五九七ヘクタールとほぼ三分の一になっている。戦前の一九三〇年代と一九六〇年代の二つのミカン畑開墾の画期を経て、中島町はミカンの専業地帯となった。

表10では島別のミカンの生産額の比較がわかる。中島が最大の生産地であり、次いで睦月、怒和、津和地、二神、野忽那と続く。一戸当たり生産額の大きさもこの順序であるが、その差も大きい。中島と野忽那島では二二万円の差がある。これはミカン園の規模の大きさでもある。

表９　戦後中島ミカンの発展

（ha）

	温州ミカン	伸び率	伊予柑	伸び率
1950 年	414	100.0	34.0	100.0
1955 年	675	163.5	55.0	161.7
1960 年	1,266	306.2	110.0	323.5
1975 年	1,204	291.3	544.6	1600.0
1992 年	626	151.6	905.0	2661.7

〔出典〕『中島町誌』中島町誌編纂委員会、1968 年、214 表、『中島町統計書』1980 年、『中島町資料編』2007 年より作成。

表 10　島別ミカン生産額（1965 年）

（千円）

	生産額	割合（％）	1 戸当生産額
中島	810,423	65.6	707.8
睦月島	135,894	11.0	644.1
怒和島	103,774	8.4	501.3
津和地島	96,361	7.8	481.8
二神島	63,005	5.1	504.0
野忽那島	25,943	2.1	381.5

〔出典〕『愛媛県忽那諸島経済調査報告』102 頁、表 57 による。

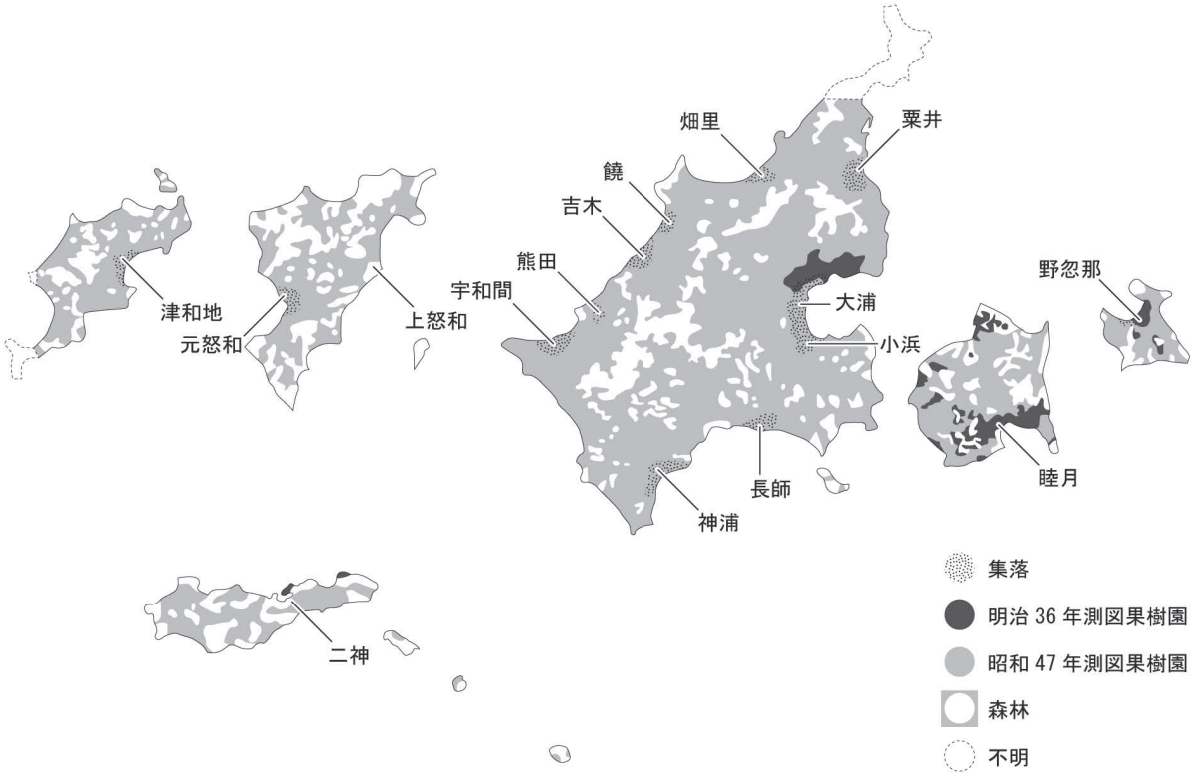


図３　中島ミカンの分布　〔出典〕　窪田重治『愛媛果樹産地の形成とその変容』104 頁を元に作成。

窪田重治の作成した地図によると（図3）、一九〇三年（明治三十六年）では忽那諸島に広がる中島ミカンは中島、睦月島を中心に小さい範囲であったが一九七二年は忽那諸島全域に広がっていることが分かる。

2　中島ミカンの出荷体制

戦後のミカン作の復興において愛媛県は先進的である。戦後いち早く郡レベルの専門農協系出荷組合が結成され、一九四八年七月に中予の伊予園芸農業協同組合連合会を筆頭に、九月には温泉青果農協が続き、東予、南予の各郡に青果農協が設立され、最後に一九五三年六月に越智郡園芸農協設立により全県のミカン専門農協組織が完成する。

県段階のミカン中央組織も、戦争直後に農業会青果課が独立して一九四七年県園芸協同組合連合会を結成するが、ＧＨＱ指導の民主化政策で批判され半年後に解散し、戦前の旧同業組合系が主導権を握って旧農会系を駆逐して、一九四八年十月に県青果農協連を結成する。これが現在の県青果連である。県青果連は宇和、西宇和、喜多、伊予、温泉の郡五組合により結成され、その後宇摩、周桑、越智、新居を組み込む。

県青果連の担い手は、生産者の出荷組合である共撰組合が主体であった。戦前同業組合と言っても商人系統ではなく、戦後の県外移出も戦前の出荷組合が、シェアの八〇％を占めており、取引の担い手は生産者であった。戦時統制機関化した出荷組合が戦後自発的組織化の中で息を吹き返したといえる。この背景は戦時中の統制経済が商人系統に決定的なダメージを与えており、戦後すぐに商人たちがミカン出荷に対応できなかったことが原因である。戦前・戦時と戦後の連続性を示すものといえよう。戦時の連続性と言っても統制機関として農業会・農会系統がそのまま残ったのではないことも事実である。[44]

温泉青果農協は戦前の伊予果物同業組合を継承するものである。郡レベルのミカン集荷・出荷組織として連合会でなく単一組織で組合員八〇〇〇人を擁する大組合である。その傘下に出荷組合が入る。

中島では、一九四七年県果樹試験場長薬師寺清司により果樹園芸研究青年同志会が設立されるとすぐこれに呼応して同同志会中島支部が結成され、同年彼らを中心として中島町・忽那諸島全域で「中島園芸協同組合」が組織された。この組合は二年間の活動で終わる。一九四八年中島農協がＧＨＱの指導で結成される。この農協には忽那諸島の四村の農民が加入した。さらに同年に大浦農産加工組合が設立されミカンジュースの加工製品化を進め、一九五四年に中予島嶼部農産農協に発展する。本格的なジュース工場を設立している。

占領が終わると一九五二年から中島の中心部大浦にミカン出荷の農事組合が設立され、島内中心に十七組合が再建された。これは戦前各村・部落単位に設立された出荷組合の復活である。さらに共同集荷の一元化が進み、輸送の一元化と市場入荷量調節のために、一九五五年に中島青果農業協同組合連合会（中青連）が発足した。郡レベルの温泉青果農協には加盟せずに島嶼部のミカン生産者団体として独立したのである。ここに島ミカンの独立した戦後集荷体制が成立した。一九六一年には中島町にある農協は統一ブランドとして㊥マークで販売することになった。ただしこの時中島で最も古い出荷組合である大浦の朝日組合（あさひ組合）は参加していない（一九七九年統合）。

中島ミカンは一九五五年に戦前の水準を突破するまでに回復した。[45]まさに「もはや戦後ではない」といわれた高度成長の開始のときであった。愛媛県は一九六三年にミカン生産では静岡県を抜き日本一の座に就く。このとき中島ミカンは全国の八・七％を占めていた。集荷の実績はこの時、東中島地区五五％、西中島地区一八％、神和地区一六％、睦野地区の一一％となっている。輸送は各出荷組合（共選場）単位に指令されおり、機帆船七五％、貨物船一五％、鉄道一五％である。島嶼部とい

う集荷条件のため鉄道でなく、機帆船輸送に依存することが多い。

先に述べたように昭和の大合併で、一九五九年に東中島村（中島）が神和村（二神島、怒和島）と合併し中島町が誕生し、一九六〇年に睦野村（睦月島、野忽那島）、そして一九六三年に西中島村（中島）を統合した。忽那諸島の全村が中島町に統合された時が一九六三年である。この時が戦後中島ミカン発展の画期となった。

一九六五年に中島町（島嶼単位）の七つの農協、十七の出荷組合、そして中青連の合併による中島町の農協への一元化が達成される。新生の中島青果農業協同組合である。この時、十七の出荷組合は農協に統合されるとともに、ミカンの共同選果（共選）は第一共選、第二共選に統合された。第一共選は東中島村を中心に、二神を含む神和村、睦野村の範囲の大浦、小浜、長師、宮野、神浦、二神、元怒和、上怒和、津和地、野忽那、睦月の各支部となり、第二共選は西中島村の範囲の宇和間、熊田、饒、吉木、畑里各支部となった。西中島地区が東中島への統合を嫌ったものである。また草分けの出荷組合である大浦のあさひ組合も統合せず単独組合となった。西中島地区の栗井と睦月地区の一部も統合せず単独共撰として残った。

写真３　中島選果場　（筆者撮影　2010 年）

以上のように、一九六三年忽那諸島の中島町への統合、一九六五年中島町七農協と中青連の統一、一九六六年中央選果場（写真３）の統一化と発足を経て、愛媛ミカンの中で中島ミカン・ブランドの統一が完成する。このとき中島ミカンは、中島青果農業協同組合として温泉郡の温泉青果農業協同組合、県の愛媛県青果販売農業協同組合連合会にも加入せず単独組合として独自の道を歩んだ。それだけ中島ミカンの自立性が強かったのである。ここに一九六〇年代中期に「中島ミカン」は、全国ブランドとして確立したといってよい。この後、一九六〇年代が中島ミカンの絶頂期であった。

全国的にも果樹の占める割合は一九六四年で全農産物価額の中の七％であったが、愛媛県ではコメとミカンが五〇％と半々を占めており、全農産物ではミカン、コメ、麦などその他の農産物が三分の一ずつである。高度成長期の愛媛県農業におけるミカン栽培の位置が分かろう。

表 11　愛媛県果実の市場別出荷割合の変遷

（%）

	京浜	京阪神	広島・呉	関門・北九州	その他・県外	外地	計
戦前（1934・35 年平均）	22	27	7	9	24	11	100
戦中（1944 年）	6	31	12	12	14	25	100
戦後（1950-52 年平均）	51	34	3	3	7	2	100

〔出典〕前掲『愛媛県果樹園芸史』表 4-54、469 頁

3　中島ミカンの販路

戦前・戦中・戦後に愛媛ミカンの販路は大きく変化する。

表11から戦前と戦後の愛媛県果実の販路の変遷を見る。この表は果物全体なので温州ミカン、夏ミカンを中心にナシ、モモ、ビワ、クリ、カキを含む。戦前ではミカンが六二％、戦中では九一％、戦後では八二％を占める。これによると、戦前の販路は京阪神が一番多く、戦時中には鉄道輸

表12　温泉郡ミカン輸送実績（1950-58年）

	鉄道	機帆船	本船	計
1950年	1,316	4,218	84	5,618
割合	23.5	75.0	1.5	100.0
1958年	10,700	1,100		11,800
割合	90.7	9.3		100.0

〔出典〕前掲『愛媛県果樹園芸史』表4-97、表4-98より作成

送の関係もあり、京阪神に集中する。戦後は京阪神を凌駕して京浜が一番になることである。もう一つの変化は戦前、戦中と外地（朝鮮、満洲、北米）輸移出が増加してきたが、戦後海外市場が壊滅することである。なお戦前・戦後を通して一貫してみられる特徴は、大都市（京浜・京阪神）に集中し、地方市場が少ないことである。これは他のミカン生産県と比較した愛媛の特徴である。愛媛のミカンが甘く品質が良く、大都市の消費者に好まれた結果である。

ただ静岡、神奈川のミカンは、ミカン生産の北限に近いということもあり酸味が強いが保存性にすぐれ、とりわけ神奈川ミカンは冷凍保存法が開発されたこともあり、越年販売で一月以降の出荷が可能であった。これに対して愛媛ミカンは保存性に弱く十二月、一月に出荷に集中して価格競争で不利な面もあった。

戦後の中島ミカンの県外輸送は当初の船舶輸送から次第に予讃線を利用した鉄道輸送が中心となった。

表12から温泉郡の戦後のミカン輸送の鉄道と船舶の比較を見ることが出来る。一九五〇年では船舶は機帆船が七五％と圧倒している。本船定期便はわずかである。これに対して八年後の一九五八年には鉄道輸送が九〇％を超える。船舶輸送は九％に縮小している。この八年間で船と鉄道が逆転している。高度成長期にミカン輸送は島嶼部も含めて基本的に鉄道輸送に転換したのである。ただ一九五〇年代は輸送運賃からすると鉄道輸送より船舶輸送の方が若干割安であったという。[46] しかし、着荷までの所要時間、到着時刻の確実性、陸揚げによる荷痛みなどで鉄道輸送の利便性が高くなっていった。この最終的な決着は一九六一年国鉄予讃線に、ミカン専用列車が走ることになったことが画期であった。

しかし、愛媛ミカンの中で中島ミカンは島ミカンであるため鉄道輸送より海上輸送を維持する度合いが強かった。中島ミカン輸送にかかわった中島大浦の一杯船主の聞書きが残っている。[47]

一九二五年生まれの黒川利勝の話では、祖父の代から一〇トンの小船で海運を始め、帆船で木材・雑貨を輸送していたが一九三九年に機帆船に変わるという。黒川は戦時中山口県柳井・徳山の船舶工兵部で上陸用舟艇を作っていたが、敗戦後父に代わり機帆船主となる。一九六〇年に鋼船に変えたのは中島ではもっとも早かったという。機帆船の三倍、一五〇〇万円かかった。鋼船福吉丸で、輸送品は食糧や引っ越し荷物と言う小型輸送である。そのあと一九六五年中島農協が忽那諸島全域の合併を行って共同出荷体制を完成した時、ミカン鉄鋼船を初めて作ったという。

> 当時のみかんの輸送は機帆船でやっておりましたが、それですと輸送に何隻も必要で、また小船で馬力も小さいため時間通りに帰って来れない等、効率が悪かったのです。そこで、農協の幹部にこれだけ大規模な撰果場を作るからには、それに応じた輸送体制を整えないといけないんじゃないかと話をしますと、非常に乗り気になってくれて、農協からの資金もあって、他の一業者と農協の専属船を一隻ずつ建設し、ピストン輸送することになりました。これは現在も続いておりますが、県内の他の地域では鉄道ストや道路事情等で集荷に大きな支障が出ることがあるのに対し、中島ではこの二隻があるために輸送体制に問題が起こったことがなく、その点では地域に役に立つことが出来たのではないかと思っています。

黒川の話は中島ミカンの海を通した輸送の有利性を明らかにしてい

る。船による大量輸送と道路・鉄道に勝る利便性である。この一九六五年建造のミカン鉄鋼船は第三福吉丸であるが、一九七五年にはコンテナ船かパレット船がいいというのでパレット方式の船幅の広いパレット型の「いよ」丸を建造し、さらに一九九〇年に「イヨエース」をミカン専用船として建造している。ミカン専用船一隻に三万個のミカンを摘みこむことが出来るという。ミカンは中島から大阪にミカン船で運ばれ、大阪から東京など全国に鉄道輸送されている。

以上、明治・大正時代の帆船から、一九三九年に機帆船に変わり、一九六〇年鉄鋼船福吉丸を建造し小型鋼船の時代へ、一九六五年新鉄鋼船第三福吉丸を建造し大型鋼船へ、そして一九九〇年コンテナ船イヨエースを建造しコンテナ鋼船の時代へと、ミカン船は時代ごとに大きく変化していることがわかる。

黒川利勝のような家族経営の一杯船主は現在では少なくなっている。中島ではただ一つであるという。まさに瀬戸内を自由に航行した江戸時代以来のミカン船の伝統を引き継ぐ貴重な存在と言えよう。

表13から愛媛県の普通温州ミカン出荷団体別数量の高度成長期の割合を見ると、中島ミカンは、松山市を中心とする温泉青果とは別に、中青連（中島青果連合会）を結成してミカンを出荷している。その割合は七八三九トンである。第一位は愛媛ミカン発祥の地宇和青果の一万七七〇〇トンである。しかし、二位が今治市を中心とする越智園芸であり、ともに島ミカンの産地である。それに伊予市を中心とする伊予園芸と松山市を中心とする温泉青果の中予地域のミカン生産は南予を凌駕している。戦後高度成長、ミカン全盛期に中島ミカン・越智ミカンに代表される島ミカンを先頭とする中予の温州ミカンの優位が明らかになる。

表14から高度成長期の県温州ミカンの販路を見るとはっきりする。京浜が七一・七％と多く、大阪の一六・一％をはるかに超えている。一九五〇年代と比較しても京浜市場への進出が著しいことが分かる。さらに中島ミカンの出荷組合別の販路を見てみよう。

表15から中島ミカンの出荷組合別の出荷先を見ると、ほとんど阪神地区を市場としていることが分かる。ただ第一共撰は京浜地方に一九％、名古屋に三％送っていること、第二共撰も京浜地方に二〇％送っている。戦後は朝鮮・大陸への輸出はなくなったが、その分東京・横浜市場に進出している。高度成長期の都市消費需要の拡大が中島ミカンの発展を支えたのである。その中で集荷農家一九五九戸のうち東中島を中心とする一二六五

表13　愛媛県普通温州ミカン団体別市場出荷内訳（1962年）

（t、％）

	出荷数量	割合
宇摩園芸	650	0.7
新居園芸	375	0.4
周桑青果	1,200	1.4
越智園芸	11,000	12.7
温泉青果	10,050	11.6
伊予園芸	10,140	11.7
喜多青果	2,344	2.7
西宇和青果	7,100	8.2
宇和青果	17,700	20.4
中青連	7,839	9
経済連	10,310	11.9
商連	8,000	9.3
計	86,706	100.0

〔出典〕前掲『愛媛県果樹園芸史』表4-48、472頁より算出

表14　愛媛県温州ミカン県外市場別出荷割合（1965年）

（t、％）

北海道	京浜	名古屋	京都	大阪	神戸	広島	計
1,596	100,993	6,109	3,742	22,718	5,281	500	140,939
1.1	71.7	4.3	2.7	16.1	3.7	0.4	100.0

〔出典〕前掲『愛媛県果樹園芸史』表4-57、476頁

表15　ミカン共撰別市場別出荷割合（1965年）

（％、戸）

	京浜	名古屋	阪神	その他	合計	農家戸数
第1共撰	19	3	69	9	100	1,265
第2共撰	20	−	80	−	100	305
あさひ組合	−	−	100	−	100	124
栗井共撰	−	−	84	16	100	150
睦月共撰	14	−	86	−	100	115

〔出典〕『愛媛県忽那諸島経済調査報告』104頁、表59による。

戸が六五％を占める。

一九六〇年代にピークを迎えた温州ミカンは、一九六七年の大旱魃、一九六八年と七三年のミカン価格暴落による大打撃を契機に、品種更新と減反が行われ、温州ミカンは衰退の道を辿る。この一九六八年を転機に中島農協は中島青果農協に名称を変更している。一九七八年には中島青果農協で温州ミカンの二割減反計画が実施され、一九八〇年には「滅びない産地」作りが目指されている。[48] 一九七五年後から伊予柑に転換していったのである。一九八二年には中島農協の販売額は史上最高の七〇億円を記録している。その後も販売額は一九九一年まで増加している。その中で温州ミカンは一九九二年には一九六〇年の半分の面積までに落ち込む。それに対して伊予柑が温州ミカンを一気に抜き去り、倍近い面積になる。その結果、温州ミカンは減反してもミカン生産高は維持されている。

表16　ミカン類生産量（1988年）

(t)

温州ミカン	伊予柑	温室ミカン	ネーブル	レモン
15447	19384	26	143	181
43.3	54.3	0.1	0.4	0.5

〔出典〕『中島町町勢要覧資料編』1997年、7頁より作成

ここで伊予柑について簡単に述べておきたい。伊予柑は一八八六年（明治十九年）山口県阿武郡東分村の中村正路方で偶然発見された。それを広めたのは苗木商である伊予の三好保徳で、一九二一年に伊予果物同業組合が顕彰碑を建てられている。[49] 伊予柑は温州ミカンより新しく明治中期から大正期にようやく普及し始めたもので、温州ミカンより高級品種として贈答用に利用された。

伊予柑の本格的な生産拡大は、戦後の高度成長期、一九六〇年代から始まっており、一九六九年の統計では中島町（忽那七島）の温州ミカンは八二％で、伊予柑は一四％に過ぎなかったが、愛媛県全体の中島町伊予柑生産は温州ミカン一一％に対して二二％を占めて愛媛県のなかでも伊予柑特産地化が進んでいた。温州ミカンより担当収益が大きく有利な作物であった。しかし伊予柑は環境条件に敏感で、自然条件から西中島、津和地が適地であり、愛媛県の一部で栽培されるだけであった。

表16から一九八〇年代の中島町の柑橘類の生産量を比較すると一九八八年ですでに伊予柑が温州ミカンを凌駕してくことが分かる。

図4から温州ミカンを伊予柑が生産量で凌駕するのは一九八五年であることが分かる。

このように中島ミカンは一九八〇年代に温州ミカンから伊予柑へと激しく変動していく。温州ミカン全盛期は一九七〇年代に終焉すると言ってよい。

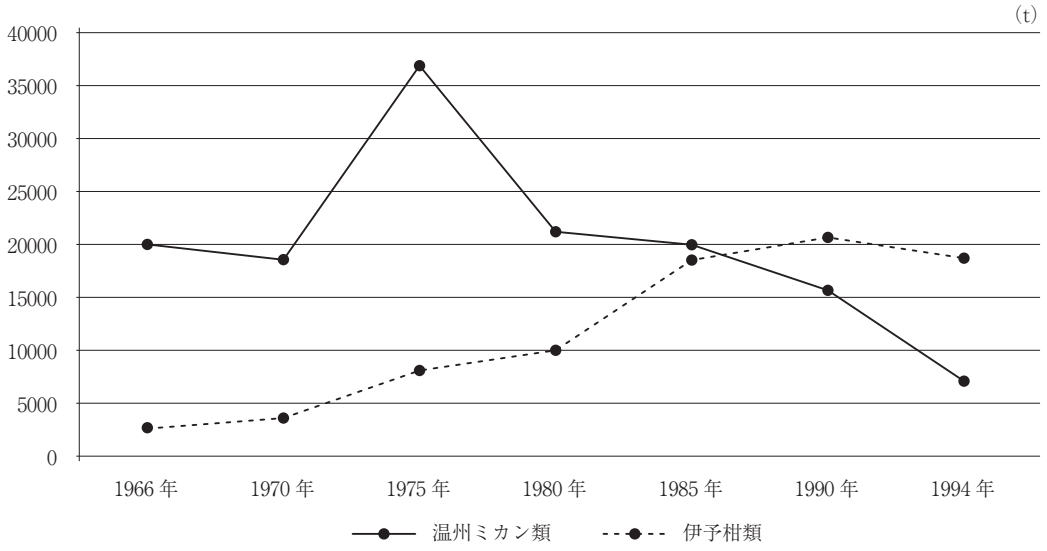
伊予柑の登場とともにミカンジュースが愛媛の「ポンジュース」として全国化した。これはミカン全体の二割に及ぶ基準から外れた形の悪いものや小さいミカンをジュースにしたものである。このジュース工場は中島青果農協ではなく、愛媛県の県農協連合会で集荷し、加工出荷している。

ここで中島青果農協（中青連）の組合員数の変化をまとめておこう。中島ミカン農家の盛衰の一つの指標である。

表17から一九六五年から一九九四年に至る中島青果農協組合員数の変化がわかる。基本的に減少傾向にある。高度成長が農業・農村から労働力を奪い取ることは全国的な趨勢である。中島の豊かなミカン専業地帯であっても同様であった。一九六五年二二一二人から一九九四年の一三九七人へと一〇〇人近くの組合員がやめていることになる。豊かなミカン専業地帯でも農業の労働力不足と高齢化は進行していた。しかし組合員数の減少といっても、その結果一世帯当たりのミカン栽培面積は増大している。柑橘生産主産地としての中島が終焉したわけではない。

一九八七年の中島町の農業粗生産額のうち、果実は九〇・五％を占め、野菜はわずか三％である。ミカンに依存する果樹専業地帯であることは変化ない。同年の愛媛県の柑橘栽培面積は第一位松山市、第二位北

図４　中島町温州ミカンと伊予柑生産量の推移



〔出典〕『㊥合併 30 年のあゆみ』10 頁より作成

宇和郡吉田町、第三位八幡浜市、第四位が中島町であり、生産量では中島町は第三位であった。[50] 伊予柑では中島町は松山市に続いて第二位であった。中島町では温州ミカンが後退しても伊予柑の台頭がそれを補完したといえる。

図４から中島町での伊予柑のピークは一九九〇年である。温州ミカンを凌駕した一九八七年から二年後である。伊予柑の品種では一九六六年に登録された宮内伊予柑（松山市の宮内義正が発見）が普及した。とくに一九六八年の温州ミカンの大暴落、一九七二年の暴落を契機に宮内伊予柑への転換が始まった。最初は伊予柑の価格が高く温州ミカンを大きく上回ったが一九九〇年代末には温州ミカンを下回るようになる。中島青果農協では伊予柑を温州ミカンに戻す指導をするようになった。

表 17　中島青果農協組合員数（正組合員）

1965 年	2212（人）
1970 年	1981
1975 年	1882
1980 年	1757
1985 年	1619
1990 年	1494
1994 年	1397

〔出典〕中島青果農業協同組合『㊥合併 30 年のあゆみ』9 頁より作成

さらにその後、国民の果樹嗜好の多様化・高級化によるミカン離れ、そしてアメリカのオレンジ、レモン、果汁など貿易自由化により柑橘需要全体が停滞し衰退していったのである。すなわち柑橘類を取り巻く国内、国外の情勢が厳しくなった結果である。一九九一年の台風十九号は中島の歴史上例のない大きな被害をもたらしミカン畑四〇〇ヘクタールに打撃を与えた。こうして一九七〇年代をピークとして一九二〇年代から飛躍的に成長してきた中島温州ミカンの一つの時代が終わろうとしていた。

Ⅳ　中島ミカン経営のオーラル・ヒストリー

1　戦後中島ミカンの経営史

ここでは現在のミカン経営農家の聞書きを中心に、現代のミカン経営を述べてまとめにしたい。

今回のミカン農家の聞き取り調査は、当時中島で一番のミカン農家であった山本一郎氏とその子息良幸氏である。中島中央公民館の豊田渉氏の紹介である。共同調査地の二神島からフェリーで中島に渡り、大浦にある山本家の自宅で一郎氏と良幸氏に一日かけて話を聞いた。

私が山本家で聞きとりをする以前に『昭和を生き抜いた人々が語る瀬戸内の島々の生活文化（平成三年度地域文化実態調査報告書）』（愛媛県生涯学習センター編、愛媛県刊行、一九九二年）に掲載された山本一郎・良幸父子の聞書きがある（以下『島々の生活文化』と略す）。一九九一年の愛媛県の聞き取りである。これは一九九〇年ごろの山本家のミカン経営を語る貴重な記録である。

私が日本常民文化研究所員として、山本氏父子（以下氏を略す）に聞き取りをしたのは二〇一〇年九月七日である。この間に十七年間の時間が経過している。この愛媛県主体の聞き取りと常民研究所共同調査員としての私の聞書きを通して、この間の中島ミカン経営の変化を知ることができる。以下二つの聞書きを比較参照しながら中島ミカン史を個人レベルから再考してみたい。

山本一郎は一九三一年四月生れである。この時七九歳である。山本は、のち島一番のミカン農家になるが、もともとは農家の跡継ぎではなく次男であったという。入り婿で山本家に入ったのである。父親は川和田といい、中島小浜出身で、東京に出て無声映画の活動弁士をしていたという。徳川夢声と同期であったという。父は同じ中島出身の女性と結婚したが、一郎が生れて早々に昭和の不況で生活が破綻し離婚、一郎は中島に母親と一緒に戻ってきたという。ちょうど無声映画からトーキーに変わるころでもあった。弁士も失業する時代だった。

昭和恐慌で母親は一郎と一緒に中島に戻った。母の出戻りである。と言っても息子は小さく簡単に仕事が見つかるわけではない。実家農業の手伝いである。一郎は、一九三七年東中島小学校に入学し、戦時下に子供時代を過ごし、アジア・太平洋戦争が始まった一九四一年（昭和十六年）に十歳であった。一九四三年四月に東中島国民学校高等科に入り、卒業後は少年航空兵になりたいと思っていた。敗戦の一九四五年八月には、グラマンが島の山を越えて、中島大浦に泊まっていた石炭船を機銃掃射して船員二人が死亡したことを覚えていた。敗戦後の一九四六年三月、一郎は東中島国民高等学校高等科二年を卒業した。一四歳であった。

余談であるが、敗戦の年、一郎は戦争中に中島から二神島の間の水道を航行する戦艦大和を見たという。戦艦大和は呉郡工廠で建造され、一九四一年十二月の真珠湾出撃の時は広島の呉軍港近くの柱島から出撃した。広島呉軍港と忽那諸島は近い。戦艦大和の沖縄特攻は徳山沖から出撃し九州に向かい、枕崎・坊野岬沖で撃沈される。この最後の大和航行は忽那諸島は経由していない。一郎氏が大和を見たのは最後の沖縄水上特攻の時でなく、その前の呉軍港・柱島碇泊のころであると思われる。

二神島の聞き取りでは、八月六日の広島の原爆を島から目撃したという人の話も聞いたが、忽那諸島の人びとは、松山に出稼ぎするより、広島に出た人も多いという。忽那諸島、越智諸島など芸予諸島は広島とは地理的文化的にきわめて近い関係にあった。

実際に、卒業後の一九四六年四月に、一郎は大工見習いとして広島呉の大内組に就職する。翌月五月原爆投下跡の広島に入る。都市壊滅から復興の広島は建築ブームであり、一郎はここで大工として腕を磨き、四年目一九歳で独立して棟梁となり二二歳で三人の弟子（徒弟）を抱える

までの、腕のいい大工になった。

二四歳のときに地元中島の山本家の長女ハツ子と結婚した。山本家の義父は日中戦争で二九歳で戦死しており、跡継ぎがいなかった。一郎は山本家の婿養子となって島に戻る決心をしたという。山本家は田畑七〇アール、山林四ヘクタール所有の上層の農家であり、跡継ぎに養子を迎えたのである。こうして、腕のいい大工棟梁は大工の道を捨てて、農家の主となった。跡を継いだのが一九五三年ごろであり、ちょうどミカンが隆盛に向かうときであった。

この時の一郎氏が大工の道を捨てミカン農園主の道を選んだ経緯については先の『瀬戸内の島々の生活文化』の聞書きに以下のように書かれている。

義父は、昭和十二年の日中戦争で、すでに戦死という家庭環境にあった。当時家には、四〇アールの水田と六五アールの畑を持っていたものの、女手ばかりの家庭ではどうにもならず、そのほとんどを親族などに預けていた。一郎さんの就農に際して、「お前が農業をやるのであれば、土地は全部戻してやるぞ」という親族の励ましとともに、山本家の耕地は二〜三年の間にことごとく彼の手元に戻ってきた。土地への執着心の強かった農地改革直後で、その貸借をめぐってのトラブルが絶えなかった時代であるが、親族の人たちはその返還に快く応じた。このあたりの潔さは、中島に生きる人々の〝心意気〟であり、古くからの同族意識の強さを物語っている。そして一郎さんも、その好意に報いるために農業経営の基礎作りに精を出したのである。[51]

こうして一九五三年大工から田畑七〇アール（戻らない三五アールは親族外の者に小作へ出したものであろう）、山林四ヘクタール（山林は農地改革の対象にならなかった）の山本一郎農園が誕生した。とりわけ一郎にとって大きな遺産となったのは山がたくさんあったことである。

一郎が家を継ぐようになった時に次のように思ったという。「自分は大工をやっても十分生活はできると思う。しかし農業をやるからには、だれにも負けないような農業をやってみたい。十年間は百姓一本に打ち込む。」と家族に話したという。[52]

山本は、婿入りするやいなや積極果敢な経営を展開する。最初は麦、ショウガ、タマネギ、スイカなど、これまでの中島の伝統的な農作物を植えたがあまり収益が上がらなかった。そこでそのころ中島で急速に伸びつつあったミカン栽培に目を付けたという。山本家の遺産である山を開墾してミカン畑にしたのである。

先の『瀬戸内の島々の生活文化』では、息子良幸に何回となく話した祖母の言葉がある。

良ちゃんのお父さんは、あんたが生まれたころには、毎日毎日朝早くから山に出かけてミカン畑を開いておった。真夏の暑いときには、このあたりの農家は皆二〜三時間は昼寝をして休むのだが、お父さんの姿が見えんと思うたら、もう山で仕事をしておった。[53]

開墾、新植、開墾、新植の日々が続いたという。一九五五年に長男良幸が生まれた日も、ミカン山の苗木の手入れに入っていた。「夕方、家に帰ってみたら長男が生まれとった」と言う。

この時代、島では代々の自給用の田をすべてミカン畑に変えた。中島の田はすべて無くなったという。わずかな自給を除き畑もほとんどミカンに変わった。わずかな水田もスズメが集中してまともに収穫することが出来ず、ミカンを作ってコメを買った方が得策という時代になったという。

こうして、ミカン栽培に転換した一郎の畑と山は、村一番のミカン農園へと成長して行った。一九六三年に水田三〇アールをミカン畑に変え、一九六四年に普通畑をすべてミカン畑に変え、二・五ヘクタールになったという。一郎は平坦部の水田を一部に新築の家を建て、あとを伊予柑栽培に切り替えたという。傾斜地の家から平坦な土地への移築は家族の生活の便利さが格段によくなったという。一九六四年には田畑もすべてミカン畑にして、三・三ヘクタール経営のミカン専業大経営になる。一九六〇年代には農作業手伝いとして、松山市から七、八人の女性を集め十一月から一月からミカン摘みのために家に下宿させたという。戦後初期のミカン収穫は手労働であり、藁で作った籠にミカンを摘んで入れる（写真4）。肩に手棒を通してミカン駕籠を二つ担ぎ、傾斜地を歩いて降ろすのである。前後二つの籠で五〇キロにもなったというから、かなりの重労働である。

一九五七年頃から傾斜地に索道が引かれ（写真5）、一九七〇年代はモノラックという単線のミカン降ろしのための荷車が設置されるようになり、労力はかなり軽減されたという（写真6）。索道はロープウェイのようなものでミカンを降ろすため上と下で二人の労力が必要だが、モノラックなら一人で作業ができる。モノラックの設置には一〇〇万円から三〇〇万円かかったという。

出荷は大浦のあさひ組合で共選して大きさを分類統一して木の石油箱（木箱）で大阪、神戸に出荷したという。ミカン船主は大浦・小浜に数軒あったという。ミカン船は一〇〇トンから五〇〇トンの小さい木造船や鉄船で二人乗り、阪神市場まで中島から二日かかった。小浜から黒川汽船で運んでもらったという。木箱の時は一季節で二〇〇〇箱から三〇〇〇箱を運んだという。

なお、中島ミカンは地元では「島ミカン」とは言わなかったようだ。「陸（おか）ミカン」は水分が多く水っぽく酸味が残るのに対して、中島ミカン

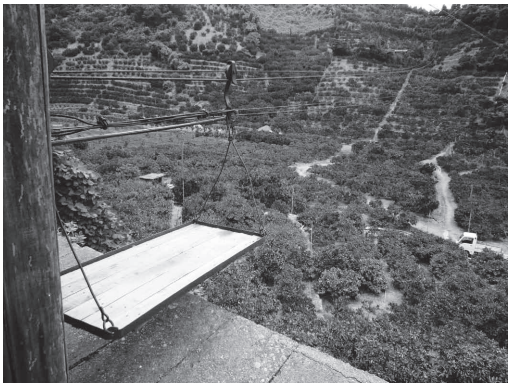


写真５　ミカン運搬の索道　（筆者撮影　2010年）

写真６　モノラック

写真４　ミカン収穫籠　（筆者撮影　2010年）

は水分が少なく酸味がなく甘いという。美味しいミカンは西向き、南向きの斜面がよいという。

こうして、一郎は一九六六年にはミカン収穫一万二〇〇〇キロ、収入一三五〇万円で、生産量において中島のトップレベルのミカン農家になったという。当時一〇〇〇万円で立派な家一軒が建った時代である。こうして戦後大工から村一番のミカン農家となった一郎は、一九六四年から六六年まで中島農協生産部長を務める。村全体のミカンの生産指導の先頭に立つことになった。

一九六〇年代は、高度成長の真っ只中、愛媛ミカン・中島ブランドの絶頂期であった。一九七二年には小柳ルミ子の「瀬戸の花嫁」が大ヒットしている。この時代、瀬戸内海の段々畑が輝いており、「島から島へとお嫁に行く」娘たちがいた。嫁ぎ先はミカン農家であったのだろうか。陽光に輝く瀬戸内の海は、戦前・戦時の苦難の時代を生き抜いた農民が、初めてバラ色の夢を手にすることができた宝の海でもあった。山本一郎のオーラルヒストリーは、昭和不況から戦後高度成長に至るサクセス・ストーリーでもある。

2　現在の中島ミカンの経営

山本一郎の話が終わったとき、武田満幸氏（以下氏を略す）が加わった。武田は一九三〇年二月生まれで、この時八十歳である。松山師範学校予科の時に勤労動員で、名古屋三菱重工業に行き、そこで終戦を迎えている。十五歳である。そのあと中島に戻り農業経営者となる。

武田は一九六五年中島青果農協設立時の理事から一九七二年に専務理事となり、一九七八年に組合長を一九九五年まで務めた中島ミカンの生き字引である。また一九六〇年代に愛媛県青果連の専務理事となり愛媛ミカンの中心人物となった実力者である。中島から愛媛青果連の専務を出したことは、中島ミカンがまさに愛媛ミカンを中核に座ったことを意味していた。

武田は中島ミカンのブランドは大浦のあさひ組合設立のあと一九五五年から㊥＝まる中というマークをつけて出荷したという。当初は東中島村のみのブランドであった。一九六〇年にミカン箱は木の石油箱から段ボールに変わったという。彼に中島青果連、愛媛県青果連の活動によって中島ミカンのブランドが確立したのである。二〇〇一年には中島町長となり二〇〇五年の松山市合併までの最後の中島町長となっている。

武田の個人経営では、戦後二、三反のミカン経営から一町歩のミカン園まで拡大した。このため労働力が必要となり、大浦集落では十一月から十二月にかけて、延べ三十人から五十人の農作業手伝いを雇ったという。出身地は南予の山から来たという。山本家の労働者も「松山から」と言ったが、この南予地方からの出稼ぎで松山経由で島に入ったものもいたと思われる。南予は言うまでもなく愛媛ミカン発祥の地であり、北宇和郡吉田町を中心としてミカン栽培の主産地である。ここ南予の周辺中山間部からのミカン出稼ぎが吉田町を超えて、中島までやって来たのだろう。ミカンの収穫時期は地域によって少し異なり、中島の収穫最盛期は十一月から十二月と早く、南予から陸地部は十二月から一月と少し遅くなるのである。そのタイムラグを利用して南予から出稼ぎが中島まで来たものと思われる。武田家では二〜三人を雇ったという。女だけでなく男も雇ったという。ミカン娘だけでなくミカン男もいた。ミカン園の最大規模は三〜四ヘクタールという。しかし、最後の中島町長だっただけに現状認識は厳しい。ミカンの値段が最盛期の一キロ一〇〇円から三〇円に低下し、中島町の四つの小学校は一つに統合され、六百人の生徒が今二十〜三十人程度という。かつての中島ミカンの栄光を担った輝きは失われたようだ。

ここから山本一郎の息子、良幸が話を引き継ぐ。世代は変わる。現在

のミカン経営の最前線で戦っている人物である。彼は先に述べたように一九五五年生まれで、この時五十代の壮年期で山本家の当主である。彼の話を聞いてみよう。

良幸は長男として、一郎の後を継ぐのは当然として果樹科のある愛媛大学付属農業高校に進学した。父の背中を見て育った良幸は、卒業後、地元農協に一時勤務した。「農協のほうが農業の仕組みを覚えるし、農家との顔見知りも多くなる」という父の配慮であった。

> 元来中島の人たちは、自分の集落や周辺とは親しい付き合いがあるが、集落を離れたり、島を別々にする人々とはほとんど交流がない。農協につとめていたお蔭で、いろんな農家と知り合いになり、そのかげで情報の交換や、青年団活動・農業後継者活動でも、すぐ友達付き合いができるようになっていった。[54]

良幸はこうして結婚までは青年団活動、結婚後は後継者協議会などミカン経営と同時に社会的活動を広げている。一九七〇年代から八〇年代青年団運動は大浦で三十人の青年のうち参加者は十人程度であったという。彼はスポーツやパーティなど若者を繋ぐ企画を作り青年団運動を活発化した。

一九六八年のミカン不作を頂点として、ミカンは早くも下り坂となる。とりわけ、一九八〇年代のオレンジ自由化、さらにバナナ、リンゴ、ナシなど多様な果物が広がり、ミカンの消費が半分に落ち込み、ミカンは果物の王座を失っていく。ミカンの衰退とともに、愛媛ミカンは一九七〇年代からポンジュースなど加工品にも進出する。

中島でも一九七〇年代後半から温州ミカンに代わって、伊予柑、ネーブルなどの栽培技術を高めてそれぞれ改植が進められた。

これに対して、良幸は「中島の立地条件に一番ふさわしい柑橘は、やはり温州ミカンであり、今価格は低迷しているが、いつか再び温州ミカンの時代がやってくる。それを期待して、それに主力を置いた経営を続けていこう。」として温州ミカン栽培を維持する。[55] さらに農業後継者の組織に加盟して、県内各地の青年農業者と交流しすぐれた産地を見学し新しい技術や経営を取り入れていく。

その結果、一九八二年に山本一郎・良幸の生産するミカン生産量は一一一トン、遂に大浦集落一の収穫を挙げるまでになった。父一郎が「どうせ農業をやるなら」とミカン作り村一番となったが、息子の代でも村一番が実現した時でもあった。こうして一郎は一九八七年に母屋を息子良幸に明け渡し、一九九一年六十歳で相続の名義変更も良幸に変えて名実ともに世代交代を行ったのである。

良幸の時代は少子高齢化、農業人口減少の勢いがミカンの代表的な主産地となった中島にも及んできた。柑橘の薬剤散布を動力噴霧器に頼ると一回当たり三日かかる。しかも暑い季節の防除が多いためカッパを着ての作業は大変な疲労をともなう。省力化が必須の課題となった。これをスプリンクラーに変えるというのが後継者協議会を通して他地域から学んだ成果であった。資金問題をめぐって父一郎と対立したが、一九八八年一・二ヘクタールにスプリンクラーを設置した。これによって三日かかった作業が半日で終わることになり、大幅な省力化を実現できた。このスプリンクラーも施設・機械の設置を設計・施行まで自分で行った。ここに大工の父の能力が息子に引き継がれたという。資金も七割で済んだという。

一九九一年の『島々の生活文化』のインタビューでは良幸は次のように語っていた。

> 農業が今はやりの3K職業の一つにあげられている。私には十二歳の長女を頭に三人の子供がおり、長男は四月から小学校一年にな

る。この子供たちに生きがいのある農業を引き継ぐためにも、この問題を解決しておくことが、私の責任だと思っている。[56]

このために良幸は一日八時間労働とゆとりある農村生活を掲げて、新たな農業経営に挑戦した。青年団運動で学んだスポーツの喜びをバレーボールで実践する良幸、伝統芸能「水軍太鼓」の練習に精を出す良幸の妻、そして年一週間の旅行を実現させている。このようなゆとりと当たり前の生活が、中島ミカンの農家で実現できることを山本一家は証明したのである。

しかし、このような中島ミカンの黄金時代は長く続かない。

その転機は一九九一年『瀬戸内の島々の生活文化』で山本父子の聞き取りが行われた年の秋、台風十九号による愛媛ミカン甚大な被害である。猛烈な風台風で、海岸に打ち上げた波しぶきが、そのまま風に乗って山の上までかかった。この海水をかぶったミカンの木はひどい塩害によって次々に枯れた。中島の全果樹園の九五・五％が被害を受け、この年のミカンの売り上げは前年の三分二となった。中島ミカン史上最悪の被害と言われ被害総額は七三億八一〇〇万円といわれる。このため政府の激甚災害指定を受け二二億円の災害資金が融資されたが、元に戻ることはなかった。これを転機にミカン園の整理が一層進んだのである。これをきっかけにミカン農家をやめた高齢者経営主も多い。

中島町の農家戸数は一九六五年の一九〇一戸から一九九一年に一四二四戸へと四七七戸、二五％減少して、逆に農家の専業率はこの間四三％から五三％に増加している。[57] このことは中島町全体（忽那諸島）では、産業としての農業の衰退とともに、主業のミカン以外の兼業、副業も衰退・消滅して行ったことを示している。島経済のモノカルチャー化である。ミカンの急速な発展の結果、他の農産物、商工業の衰退を招き、専業が危機に陥った時の抵抗力が著しく弱体化したことを示す。さらに追い打ちをかけるように、一九九一年の台風一九号の打撃を受け、以降農業後継者は減少し、新たな就農者は毎年二～三人程度で、農家の高齢化が急速に進んだ。

ついに一九九七年、中島青果農協は、温泉郡の全農協と合併し、えひめ中央農協に吸収され、二〇〇二年には、ついにミカン箱から中島ブランドが消えた。一九六五年中島ブランドが成立してから四十年足らずで中島ミカンは終焉を迎えたのである。戦後史の一サイクルが終わったのである。

さらに、現在ではミカンにいろいろな柑橘類の交配をかけて、品種更新を大規模に進めている。清見、はるみ、せとか、不知火など多様な品種を生み出している。しかし、新品種は必ずしも土壌と適合せず、ミカンの衰退を止めることはできないという。

現在、山本家では二〇一〇年三・五ヘクタールのミカン経営であったが、二〇一一年から一・三〇ヘクタールのミカン畑を廃園にするという。三・五ヘクタールで島一、二をあらそうミカン農家が、二・三ヘクタールに削減されるのである。良幸氏の怒りは大きい。ミカン大経営が成り立たない現状と農政への怒りである。

農家がこれまで営々と開墾し、新技術を開発・応用して努力しても、政策がオレンジ自由化、果汁自由化、さらに現在ではＴＰＰなど、アメリカを中心とした国際圧力に屈して、日本の農業・農民を守ることができなければ、経営規模・生産費で劣位にある日本農産物が、国際価格競争では太刀打ちできないこともまた厳しい現実である。

二〇一〇年秋私は話を聞いたあとに、山本ミカン園をクルマで案内してもらった。廃園がところどころに広がり、今は使われない山の傾斜地に敷かれたモノラックが錆びたまま放置されていた。ミカン園の崩壊を肌で感じた。

いまミカン経営農家は危機にある。しかし、良幸は中島ミカンブラン

ド復興にかける思いも強い。まだ中島ミカンの再興をあきらめているわけではない。

「柑橘農業で生き残れる道を新しい角度から開拓しよう」「私たちでやっていける生産の仕組みを今から考え、品種更新による労力配分を行わなければならない」「足りない労働力を、もし海外から輸入できる時代を迎えれば、さらに経営規模を四〜六ヘクタールに拡大して、新しいタイプの中島農業を築き上げてみたい」と抱負を述べている。[58]

一時衰退したリンゴがフジの品種更新により、日本のみならず世界のリンゴ市場を席巻したように、今後日本から生まれ日本の適地適産として育った温州ミカンが、このまま一路衰退することはないと信じている。実際に新たな品種として甘平、紅まどんななど注目を浴びている。

以上、忽那諸島のミカンの歴史から我々は何を学べばよいのであろうか。まとめに当たって瀬戸内海ミカンの盛衰史から私の感じたことを述べておきたい。

忽那諸島のミカン経営の危機は、決して離島ゆえの少子高齢化が原因ではない。現在の地方の疲弊と地方創生が叫ばれる現状の集中的表現が、忽那諸島の現状に顕在化している。これは現代日本の構造的危機でもある。

忽那諸島は中世・近世を通して、瀬戸内海の沖乗り航路に位置しており水上交通の要衝として発展した。忽那一族が「海の領主」として君臨した中世以来、島々に独自の経済社会にもとづく文化を作り上げていた。近代においてもそれは睦月島・野忽那島の縞木綿と行商、中島の和牛仔牛とショウガ・除虫菊に代表される畜産と畑作の結びついた経済構造、二神島の由利島漁業権を基礎とした漁業構造、津和地島・怒和島の沖乗り航路の潮待ち・風待ちの港町と津和地島の漁業とタマネギ、怒和島の漁業とスイカなど、船乗り商人と島独自の漁業と畑作の結びついた経済構造など、江戸時代を経過して明治中期には忽那諸島には島々独自の経済社会と文化が根付いていた。それを大きく変えたのが温州ミカンであった。

忽那諸島では明治の近代化のなかで新たな市場経済に対応した商品作物として温州ミカンを導入したのは明治中期である。導入の背景には島の風土と土壌という基礎的条件と同時に島独自の文化があった。島民の「海を媒介とした地域社会」のもつ開放性、進取性がミカンを先駆的に導入しえた条件であった。島はあらゆる情報の先進地であった。伊予絣の行商と和牛商人など島外部との交流を持つ島民が、和歌山、広島から温州ミカンを海を通して積極的に導入したのである。

実際に忽那諸島にミカン作が発展したのは第一次世界大戦の時からである。大戦ブームといわれるように第一次世界大戦下の急激な経済成長は農村から都市に労働力を収集させ、大衆社会状況を早熟的に生み出した。ミカンは阪神市場など都市部の需要によって島外部にあらたな市場を発見する。この販路も江戸時代以来の瀬戸内海航路のいわゆる沖乗り航路が切り開いたものであった。さらにミカン作を発展させたのは昭和恐慌であった。「米と繭の経済構造」が解体し、農村危機を脱出するため繭に代わる新たな商品作物としてミカンがその代替作物となった。実際愛媛県では一九三〇年代にミカン作が全県的に普及し和歌山を静岡とともに猛追するのである。忽那諸島のミカンは、植民地朝鮮や満洲、さらには青島など華北へのミカン移出、輸出が躍進する。恐慌後農村は一路衰退したのではない。戦時経済の発展と植民帝国の一環として一九四〇年ごろまでは、新たな商品作物の模索の時代が訪れるのである。それも戦時統制によってミカンは不要不急作物として抑制される。

しかし戦後も一九五〇年代にミカンは復興する。戦前・戦時に形成されたミカン生産と流通構造を前提に、一九六〇年代に愛媛ミカンは静岡を追い抜き全国一となり、とりわけ忽那諸島のミカンは「中島ミカン」ブランドして、愛媛県のミカン先進地宇和島を凌駕するまでに躍進す

る。この背景には阪神市場から京浜市場に進出する高度経済成長の都市労働者の需要であった。大衆社会が日本で定着した一九六〇年代に、愛媛中島ミカンはその絶頂期を迎えるのである。この背景には、植民地などの外需を失うが旺盛な内需への転換、国内需要の増大をもたらした高度成長がある。船から鉄道輸送への転換、木箱から段ボールへの転換、阪神市場から京浜市場への転換と大都市の大衆需要に中島ミカンが適応した結果である。こうして中島ミカンは第一次世界大戦、一九三〇年代、高度成長の三段跳びで、忽那諸島を席巻し「ミカンの島」に塗り替えたのである。その結果、忽那諸島では一九七〇年段階で年収一三〇〇万円に達するミカン農家生み出し、豊かな離島社会を実現した。不便で貧しいと言われた離島を、豊かな黄金の島にミカンは変えたのである。市場経済と現代資本主義の勝利であるかのように見える。

しかし、高度成長が終わるとミカン経営は国際的にはオレンジ自由化などの外圧、国内的にはくだもの消費の多様化によりミカン需要は減少し、忽那諸島のミカン経営は急激に衰退する。

私はこのようなミカン経済の構造を比喩的にモノカルチャー化と規定した。その意味は高度成長で確立し、その後崩壊する論理を、ミカン専業経済として島々の経済構造を一色に同質化した意味を、モノカルチャーと読み替えたからである。確立の論理は崩壊の論理を含むのである。島の経済が単一商品作物に一元化することは、植民地宗主国にとって、ここでは本国経済の中枢として日本大都市にとって、安い商品を大量に消費するためにはきわめて効率的である。しかしいったん宗主国、本国経済中枢にとって不要となると、その経済構造は脆弱で、植民地経済のように、島の経済は一気に崩壊する危うさを有する。高度成長で確立した忽那諸島の経済構造はそのようなもろさを持っていたのではないか。

このような「ポスト高度成長」の離島社会の危機打開の展望は簡単ではないが、私は歴史から学ぶことであると思う。すなわち、忽那諸島の歴史から、島々がそれぞれ独自の地域的個性を持ち、多様な経済社会と文化を有していた近世から明治中期にいたる個性豊かな島々に立ち戻ることである。一色の同質社会でなく、それぞれ島が固有の生業と文化を取り戻すことではないだろうか。明治中期に市場経済に対応して、忽那諸島は、漁業、畑作（ショウガ、除虫菊、スイカ、タマネギ、甘藷など）、水田、縞木綿、行商、海運業、造船業など多様な経済構造を有していた。島固有の条件を生かした生活基盤をそれぞれ形成していた。もちろん現在を単に明治や江戸時代に戻すことは反動的ロマン主義である。そのような単純な過去回帰ではなく今後は、現代の商品作物ミカンも活かしながら地域的個性をフルに発揮した新たな独自の地域経済社会を新たに作り直すことであろう。その際に昔のように島々が孤立するのではなく、連携し共生する道を選ぶことである。

忽那諸島の蜜柑史の歴史を振り返ると、「海を媒介した離島社会」は「土地を媒介とした農山村社会」と違っていることである。海は情報とモノとヒトの流入を加速する。進取の気風は海から生まれる。温州ミカンの苗木も情報も、人も金も海を渡る。それは国内のみならず海外への広がりをもつ。もともと忽那諸島はハワイ移民の多い山口県周防大島に近い。周防大島に接する沖家室島は、由利島の漁業権をめぐって二神島と争った島でもある。この周防大島はミカンの島でもあった。ミカンは和歌山、愛媛のみならず、広島沿岸の離島からも瀬戸内海を渡って忽那諸島に入ってきた。

和歌山も広島も海外移民数が多い県である。戦前移民者数は県別では広島が第一位、二位沖縄、三位熊本、四位福岡、五位山口、六位和歌山である。[59] 瀬戸内海に面するミカン県は移民県でもあった。愛媛は一七位と全県では低いが宇和島郡は移民が活発である。宇和島ミカンで有名な八幡浜市穴井は「アメリカの風が吹いた村」として有名なアメリカ村である。[60] ミカンと移民、一見無関係に思えることが海を視点とすることで

繋がる。新天地を求めて海を渡る。進取の気風は改革・開拓の気風に連続する。

もう一つ、忽那諸島の歴史を顧みると、一九五〇年代に注目する必要がある。とくにミカン経営のオーラルヒストリーで述べた山本一郎の経験から学ぶことが多い。昭和恐慌で父が失業したため当時子供であった一郎は、母とともに故郷である中島に戻る。学校を卒業後いったん広島に出て大工として成功したあと、一九五三年に田園に回帰し、みかん農園を始め、一九六六年には島一番のミカン農家になった。ここには一九五〇年代の新たな商品作物としての温州ミカン発展の可能性にかけ、都市から帰農し、大工という他の職業から農業に転身して、新たな農業人生を切り拓いた男の挑戦がある。一九五〇年代は、伝統的な島社会が高度成長とともにミカンを中心とした新たな農村社会に変貌していく転換点に位置していた。都市や他産業からの農民転身、様々な作物栽培への挑戦を経てミカン経営を選択していった家族戦略があった。現在の地方創生の中で学ぶべき教訓は、このような都市と農村の人的交流、さまざまな経営戦略の選択、そしてそれを実現する若者のエネルギーである。山本家の歴史がそれを教えてくれる。現在は戦争の惨禍から復興した一九五〇年代の可能性に学ぶ時であろう。しかしそれは単純に高度成長の繰り返しであってはならない。モノカルチャー化ではなくマルチカルチャー化へと新たな飛躍が必要である。時代は大きく転換している。

さらに、今後の離島社会をこれまでの歴史と伝統を踏まえて現代を「希望ある移行期」とするには経済構造の変革だけでなく、社会全体の構造改革として「田園回帰」を実現することであろう。「田園回帰」とは二一世紀農山村の再生のために近年一つの流れとなってきた「都市住民の農山漁村への定住願望」を評価し、地方再生をめざす考えである。[61] このなかで広井良典氏は第一に「コミュニケーション経済」の視点として地域の自然エネルギー利用も含めた「経済の地域内循環」を訴える。また第二に「伝統文化の再発見」として「鎮守の森」構想を打ち出している。お祭り、市（経済）、寺子屋（教育）の地域拠点の復権である。第三に「社会保障」として高齢者、子供支援組織の地域形成であり、最後に「都市と農村との持続可能な相互依存」を提起する。このような新たな持続可能な社会の構築は、市場経済のモノカルチャー化とはかなり違った道であろう。このような「土地を媒介とした農山村社会」の再生から学ぶだけでなく、「海を媒介とした離島社会」の歴史を学ぶことによって、開放的で進取の気風に富んだ未来を切り開くことが出来るであろう。現在、私たちの生きる地域社会は未来への新たな分岐点にきているのだと思う。

おわりに

忽那諸島、中島町への近現代におけるミカン導入から、発展、衰退の全過程を明らかにしてきた。

最初に提起した三つの課題、①中島ミカンの導入はどのようにしてなされたのか、②忽那諸島の中島ミカン発展と海の関係はどのようなものであったのか、③ミカンは忽那諸島、中島町の経済構造をどのように変えたのか、はこれまで明らかになったものと思う。

第一の中島ミカン導入は和歌山有田の温州ミカンの伝来、広島からの伝来、そして伊予郡砥部に伝来したものなど、三つのルートが考えられる。それに対応して導入年度も江戸時代後期、一八七二年（明治五年）、一八八七年（明治二十年）といろいろな説がある。現在の中島温州ミカンの導入の通説は、大浦の森田六太郎によるもので移植年に違いがあるが、和歌山県有田からの苗木であることが分かった。

第二の忽那諸島とミカンと海の関係は中世、近世以来の水軍と水運を前提に発展してきたことが明らかなる、とりわけ大正後期から昭和初頭、すなわち一九二〇年代から三〇年代のミカンの飛躍的発展の時期に

忽那諸島からミカン船で阪神市場にミカンが売られていったこと、さらには朝鮮、満洲市場へと海を通して広がっていった。瀬戸内海の水運を考えなければ中島ミカン、島ミカンの今日の隆盛は理解できないことが分かった。

第三のミカンと忽那諸島の経済構造の変化であるが、戦後高度成長による阪神、京浜市場向けの大衆消費は中島ミカンの爆発的発展をもたらした。この結果島の経済構造は完全にミカン専業化、ミカン栽培に一元化した。これをミカンモノカルチャーと表現したが中島町の経済構造の変化は愛媛県でもっとも典型的に展開したものであることが分かった。

このような三つの課題を明らかにするために、私は四つの次元からミカン史にアプローチした。第一は県の次元である。愛媛県青果連の動きがそれを代表する。第二は郡の次元のミカン史である。これは伊予青果連と中島青果連との動きに代表される。第三は町村の次元である。東中島村から中島町に至る各島々のミカン史であり、中島町、神和村、睦野村、二神の各農協の動きに代表される。第四は個人史の次元である。ここでは中島町大浦のミカン農家のオーラル・ヒストリーを取り上げた。今回は十分取り上げえなかったが、これに国家レベル、国際レベルの果樹政策、国際関係のなかでミカン史の動きを加える必要がある。

歴史学の最終課題は時代の歴史像を描くことである。このためには国際関係、政府、県、郡、町村、個人と、次第に分析対象を下降して、最後には個人史を明らかにすることによって完結する。個人を対象とするオーラル・ヒストリーの意義もここにある。これによって一人ひとりの個人が、歴史的構造的諸関係のなかで、上と横の様々な社会的結合関係を通して個人の思想（思考）と行動をはぐくみながら、歴史の大きな動きの中に組み込まれつつ、個人が生活向上を目指して奮闘する。このように人々の歴史を過去から作り出された構造と下から歴史を作り上げていく主体との関係で明らかにすることが歴史学の課題である。とりわけ、歴史を動かす主体として、生産力の担い手である民衆（生産、流通、消費を含むすべての人々）が歴史の推進主体であることを明らかにすることが求められる。この構造と主体の関係が、それぞれの時代の歴史像を作り上げるのである。

本テーマである瀬戸内海中島ミカン史がこのような歴史学の方法を前提に、一人ひとりの民衆の奮闘の歴史を少しでも明らかにすることが出来ていれば幸いである。

注

（1）山口徹編『瀬戸内諸島と海の道』（吉川弘文館、二〇〇一年）二一八、二四六頁

（2）『愛媛県忽那諸島経済調査報告』（財団法人日本離島センター、忽那諸島経済調査委員会刊行、一九七〇年）、五一頁

（3）同上書、五四頁、「図15中島町の旧町村別人口指数の推移」による。

（4）『昭和を生き抜いた人々が語る瀬戸内の島々の生活文化（平成三年度地域文化実態調査報告書）』愛媛県生涯学習センター編、愛媛県刊行、一九九二年）二五九頁

（5）同上書、二六四－五頁

（6）前掲『愛媛県忽那諸島経済調査報告』九五頁

（7）前掲『瀬戸内の島々の生活文化』二七三頁

（8）『中島町誌』（中島町誌編纂委員会、一九六八年）、五七二頁

（9）戦前のミカン収入は『新編温泉郡史』（椿南松田卯太郎編、一九一六年）の東中島村と西中島村の統計、四三六頁と四五六頁より算出したものである。

（10）前掲『愛媛県忽那諸島経済調査報告』七三頁「表33中島港の取扱貨物（移出）昭和四十二年」による。

（11）前掲『中島町誌』（中島町誌編纂委員会、一九六八年）五七四頁、二三六表による。

（12）前掲『新編温泉郡史』四五六頁

（13）『神和三島誌』（神和かたりべの会、一九八九年）一六四頁

（14）前掲『中島町誌』六一三頁

（15）前掲『新編温泉郡史』四七〇－四七一頁の図表より算出した。

(16) 『愛媛県果樹園芸史』（桐野忠兵衛編、愛媛県青果農業協同組合連合会、一九六八年）三六頁。その根拠は『伊予のくだもの』（伊予果物同業組合一九三二年）による。
(17) 前掲『中島町誌』
(18) 同上書、三六頁
(19) 前掲『愛媛県果樹園芸史』三三頁
(20) 『愛媛の果樹』（愛媛県農会、一九一〇年）九－一三頁
(21) 『愛媛県果樹園芸史編纂座談会』中予編、伊予郡砥部町大内清一談、八頁
(22) 前掲『愛媛県果樹園芸史』二六頁
(23) 同上書、五五三頁
(24) 同上書、五六〇頁
(25) 『明治四十四年十一月温泉郡東中島村郷土誌』（温泉郡東中島村役場）一九頁より算出。
(26) 前掲『神和三島誌』、二三四頁
(27) 同上書、八八頁
(28) 前掲『愛媛の果樹産地の形成とその変容』九一頁
(29) 前掲『愛媛県果樹園芸史』一〇〇頁
(30) 前掲『愛媛県果樹園芸史』七五頁
(31) 前掲『愛媛県果樹園芸史』八二頁
(32) 同上書、一八九頁
(33) 同上書、一六八頁
(34) 前掲『愛媛の果樹産地の形成とその変容』九六頁
(35) 前掲『神和三島誌』、二三七頁
(36) 前掲『愛媛県果樹園芸史』五一一頁
(37) 前掲『愛媛の果樹産地の形成とその変容』九六頁
(38) 前掲『愛媛県果樹園芸史編纂座談会記録』、桜木寛一郎（県農会技師）談、一五頁
(39) 前掲『愛媛県果樹園芸史』一七八頁
(40) 前掲『中島町誌』五六二頁
(41) 前掲『愛媛県果樹園芸史』三〇〇－一頁
(42) 前掲『愛媛県果樹園芸史編纂座談会記録』、菅野寿章（県青果連常任顧問）、一八－一九頁
(43) 前掲『愛媛県果樹園芸史』二九七－八頁
(44) 戦後出荷活動において生産者、商人、農会の主導権のあり方は戦前の三者の関係の県ごとの違いによって異なる。同業組合（生産者）の強い愛媛、広島、岡山、和歌山、農会の強かった山口、商人の強かった香川県が戦後の県青果出荷組織の性格を規定したという（前掲『愛媛県果樹園芸史』四二四頁）。
(45) 前掲『中島町誌』五六三頁
(46) 前掲『愛媛県果樹園芸史』五一九頁
(47) 前掲『瀬戸内の島々の生活文化』三二一－四頁
(48) 『㈱合併30年の歩み』（中島青果農業協同組合、一九九六年）、四八頁
(49) 前掲『愛媛県果樹園芸史』四〇頁
(50) 前掲、窪田重治『愛媛の果樹産地の形成とその変容』八六頁
(51) 『昭和を生き抜いた人々が語る瀬戸内の島々の生活文化（平成三年度地域文化実態調査報告書）』（愛媛県生涯学習センター編、愛媛県刊行、一九九二年一五六頁
(52) 同上書、一五七頁
(53) 同上書、一五六頁
(54) 前掲『瀬戸内の島々の生活文化』一五九頁
(55) 同上書、一六〇頁
(56) 前掲『島々の生活文化』一六三頁
(57) 統計数字は『愛媛県中島町町勢要覧（資料編）』二〇〇一年による。
(58) 前掲『瀬戸内の島々の生活文化』一六五頁
(59) 県別戦前移民者数（一八九〇九～一九四一年）」『アメリカ大陸日系人百科事典』明石書店、一〇六頁。典拠は国際協力事業団『海外移住統計』（昭和二七年～平成五年）による。
(60) 村川庸子『アメリカの風が吹いた村』愛媛県文化振興財団、一九八七年
(61) 保母武彦『日本の農山村をどう再生するか』（岩波現代文庫、二〇一三年）、小田切徳美『農山村は消滅しない』（岩波新書、二〇一四年）、小田切徳美・広井良典・大江正章・藤山浩『田園回帰がひらく未来』（岩波ブックレット九五〇、二〇一六年）参照）